

目次

2006年3月
第147号

巻頭言

福島県教育センターの変容

福島県教育センター次長 岩淵 賢美…………… 1

発信

特集 研究成果報告

ふくしまの教職意識調査 教育調査チーム…………… 4

学校評価を通じた学校組織活性化の在り方
～学校組織活性化の手だてとしての「実践プログラム」の開発～
学校評価研究チーム…………… 6

単位時間に着目したシラバスの実践的研究
～子どもが活用する「学習の道しるべ」としての機能を重視して～
カリキュラム開発研究チーム…………… 8

授業づくりに役立つ情報交換を双方向で！
～教育センターがそのコーディネートを～
情報化推進研究チーム…………… 10

カリキュラムセンター活用状況…………… 12

福島県教育研究発表大会報告…………… 14

外部講師の講演から…………… 15

連載

学校評価

学校の組織を生かして教育目標の実現を図る ～組織活性化の具体的な方法～
学校評価研究チーム…………… 16

教員ネットワーク

福島県内の教員が、よりよい指導方法を追求する「教員ネットワーク」を！
情報化推進研究チーム…………… 18

授業に生きる資料

元気の出る小学校英語活動の進め方 ～「英語そのもの」に触れ、味わう活動を通して～
教科教育チーム 指導主事 黒須 智則…………… 20

学校教育と組織マネジメント

実効ある組織マネジメントをめざして 教科外教育チーム…………… 22

情報モラル指導を推進しよう

情報モラル教育の充実に向けて ～7つのポイント～ 情報教育チーム…………… 24

実践 学校教育相談

やる気や自信を高める部活動指導 教育相談チーム…………… 26

豊かな教育実践

概念的知識を獲得する社会科
～単元シラバスの活用と自己評価活動を通して～
田村市立美山小学校 教諭 高橋 政喜…………… 28

小学校社会科で単元を通して活用できる「福島県内の地域を扱った教材資料」について
～4学年「わたしたちの県」及び5学年「国土とくらし」～
南郷村立南郷第一小学校 教諭 増島 哲也…………… 32

学習に対して自立し、確かな学力を身に付けた生徒を育てる指導の在り方
～主体的な学びを促す学習活動の工夫～
会津若松市立一箕中学校 教諭 山口 智…………… 34

おしらせ

実践に役立つ教育資料 ～最近の研究紀要・資料から～…………… 36
平成18年度研修講座案内

<表紙デザイン：福島県教育センター教科教育チーム 指導主事 片平 仁>

福島県教育センターの変容

福島県教育センター次長

岩 淵 賢 美

1 はじめに

教育センターの前身である福島県教育研修所が設置されてから55年の時が流れた。昭和48年度採用の私には、教育センターとなって竣工間もない真新しい本館や宿泊棟で新採用教員研修を受けた思い出がある。しかし、その後40代半ばを迎えるまでの私にとって、教育センターはほとんど縁のない場所であった。

その間は、教科指導はもとより学級経営・部活動指導と私なりに懸命の日々だったことは間違いない。いつも忙しく、研修を受ける余裕などはないと思って過ごしていた。特に教職経験10年前後の時期は、いささかの経験に自信も加わり慢心もあったように思う。もちろん、その後いろいろな場面で年齢相応の仕事が求められるようになると、一転して自らの力不足に悩むことが多くなった。

教育センターへの勤務を命じられたとき、友人に「あなたの教員人生もまとめの時期、足りないものを補って、経験や思いを後進に繋ぐことが使命ではないか」と諭され、納得をして赴任をした。

教育界も改革の時代であり、教職員には自らを高める姿勢や、そのための努力が求められている。それに応え支援することを目指す福島県教育センターも今大きな変容を遂げつつある。

2 福島県教育センターの改革

(1) 改革の流れ

平成10年9月の中教審答申『今後の地方教育

行政の在り方について』において、「地方公共団体の主体的役割を重視し、国はそれを支援する」・「カリキュラムに関するナショナルセンターの設置について検討する」と述べられたことを端緒に、平成13年には国立教育政策研究所の改組再編が行われ、地方においても「教育センター改革」が活発に行われるようになった。

福島県教育センターは、この流れに沿いながらも独自の改革を進めてきた。

(2) 改革への取組み

福島県教育センターの改革への取組みは、平成14年度の組織改編から本格化する。

6部制から3グループ制へのこの改編の中心は『企画・研究グループ』の創設である。それは教育センターが、従来からの教員研修の専門機関としての役割を堅持しながらも、講座を開いて研修者の来所を待つことだけでなく、新たな内容の業務を加え、教育の現場に自ら歩み寄る姿勢を鮮明にしようとするものであった。

具体的には、「教育調査チーム」が、各種の基礎的なデータの継続的収集と分析を行い、3つの研究チーム（現在は、「学校評価」・「カリキュラム開発」・「情報化推進」の各チーム）が今日的な教育課題に関する基礎的・実証的な研究を行う。そして、教育センターの業務全体についての集中管理と振興を図る役割を「企画振興チーム」が担うものである。調査・研究等の成果は、各種の研修講座（既存のものだけでなく新たな分野の講座も設置して拡大）の中に生か

し、さらに県教委におけるシンクタンクとしての役割をも担うことを目指している。

(3) 業務の拡大と改善

組織の改編に加え、「研修の一元化」（本庁から25の講座が移管され、基本研修・職能研修・専門研修を体系的に教育センターで所管する）により、教育センターの業務は一層拡大されたが、そのことによって新たな対応を求められることとなった。

「教育センターが変わります」というキャッチフレーズを掲げ、その変容をアピールすることとなったのは平成15年度であり、主なものとして次のようなものがあった。

- 希望制・二期制による受講者の募集。（専門講座を、原則として希望制にする。年度始めの慌ただしい時期に募集することを避ける。）
- 現地研修の拡大。（受講しやすいように担当者が各地域に出向いて研修を実施する。）
- 長期休業中の講座数を増やす。（受講の難しい課業期間中の講座を少なくする。）
- 聴講制度の創設。（各種講座の一部である中央講師等の講義・講演等の聴講を可能にする「ピンポイント受講」の制度。）
- 指導主事派遣事業の開始。（各種研究会や校内研修等の講師として教育センターの指導主事を派遣。）
- 研修日数の縮小。（それまでの原則2泊3日から1泊2日に変更。）

これらは、教育の現場を思い、教職員の負担を少しでも軽くして、研修に出やすい環境を作りだそうとするものであった。

(4) 思いを学校に伝えるために

しかし、教育センターの思いを伝えることは簡単ではなかった。

それまで、小・中学校において専門研修は各講座の定数を各教育事務所ごとに割り振り、域内の学校から受講者を選んでもらう推薦制が原則であったのだが、希望により直接応募をする形となって2年目において、定員数に対して約80%程度の受講者しか集めることができなかった。講師派遣等の数も目標に達しなかった。「思いは、学校に届いていない」というのが実感であった。

教育調査チームが実施した「福島県教育センター事業にかかるアンケート調査」の分析結果も踏まえて、更なる実践を行ったのは、平成16年度であった。

それは、関係機関との連携の在り方の検討や、広報活動の抜本的な改善が中心となった。例えば、情報の伝達手段としてWebを活用することは手軽な方法ではあったが、効果は極めて少ないことがわかった。そこで、担当者が自らの講座に寄せる思いは自らの言葉と方法で伝えたり、年度替わりの時期を避けて、工夫を凝らしたポスター・パンフレットに手作りのチラシを添え、県内約2万名のすべての教職員に送付したりする方法に変えたのである。

また、一連の教育センター改革をひとつの到達点としてまとめ、具現化するものとしてのカリキュラムセンター開設の準備が進められたのも16年度である。

3 カリキュラムセンターの開設

カリキュラムセンターとは、福島県教育センターの中に加えた新しい機能であり、カリキュラムという言葉に「教育活動の総体」ととらえ、教員や学校、教育委員会などの日常の教育活動全般について、多様な形での支援を行おうとするものである。17年7月1日には、その窓口となる東北では初めての相談室も開設してスター

トした。半年余が経過した現在、多くの相談や依頼を受け、概ね順調な滑り出しを見せている。

多岐にわたるカリキュラムセンター業務の中で、特筆すべきものは指導主事を講師として派遣する事業である。各種機関などへの研究・研修会から、小規模校における校内研修にまで、要請に応じて多く講師派遣を行っている。

その内容も多様であり、教科や特別活動だけでなく情報関係や教育相談さらに学校評価・シラバスに関する事など、教育センターの全チームの業務の内容に及ぶものとなっている。派遣先での受講・参加者数は、センター内の研修講座参加者の1.5倍にもなっている。

一部には学校や市町村教育委員会のプロジェクトへ参画する形も芽生えており、今後ITに関わる手法等も含め、教育センターの総合力を集約しての柔軟な取組みの展開が予想される。

4 これからの教育センター

希望制による研修受講者募集の3年目である本年度、新しい教育センターの姿をご理解いただくことができた結果、定員を上回る希望者が集まった。しかし、学校がより一層特色を明確にし、教職員の資質向上が求められている一方で、研修に出にくい状況がさらに深刻になっていることも事実である。教育センターがやらなければならないことはまだまだたくさんある。

今、教育センターは県教委の現職教育計画体系の多くを所管する立場にあり、その充実のために果たすべき責務は極めて大きい。研修講座の改善については、担当者が常に研鑽を重ね、高い専門性を見識を備えていることが重要であることは言うまでもないが、何よりも「今何が求められているか」をしっかりとらえて、それに応じていくことが重要である。

調査・研究の業務についても、さらにその内

容を教育の現場に役に立つ実践的なものにする視点から高めていく必要がある。

教育センターでは、業務全般について外部からの意見・要望等を聞く方途を検討し実施に移しつつある。講座の内容について評価を受けることや、その成果の教育現場への伝達・還元等については、詳細な調査も実施して改善につなげる努力も行っている。今後その一層の充実を期して行きたい。

また、地方分権化が進む中で、各市町村教育委員会等との連携の在り方についても具体的に考え、実行に移していくことも急務である。

5 おわりに

法定の研修となった経験者研修Ⅱは、全体概要の理解と計画立案を目指す「共通研修」からスタートする。高校においては教育センターにすべての対象者を集めて実施されるが、教職経験10年を経て校務の中核にあり、負担も相当なものになることから、毎年4月当初は不安や不満が多く寄せられる。

しかし、研修が進む中で、多くの受講者の意識に変化が見られるようになる。今年度においても、ある教科の講座に参加していた教員の言葉が印象に残る。「将来、さすがベテランといわれる授業ができるようになるために、今の私を磨きたい。そのためにこの研修に主体的に取り組んでいる」。

私の時代にはこの研修はなかったが、もし受ける機会を得ていれば、私の教員人生は相当違ったものになっていたのではないかと思う。

すべての教職員のライフステージにしっかりと寄り添い、その時々を力強く支えて行きたい。既成の概念にとらわれることなく、更なる変容を重ねていくことが教育センターの使命である。

ふくしまの教職意識調査

教育調査チーム

1 調査の目的

教職に関する意識の現状と課題を明らかにし、教員自身の資質・能力向上のための一資料とすることを目的として調査を行った。

2 調査結果の概要

(1) 調査方法

アンケート調査（県教育センター作成）

(2) 調査対象・・・抽出校

公立小・中学校教諭、県立高等学校教諭の合計516名

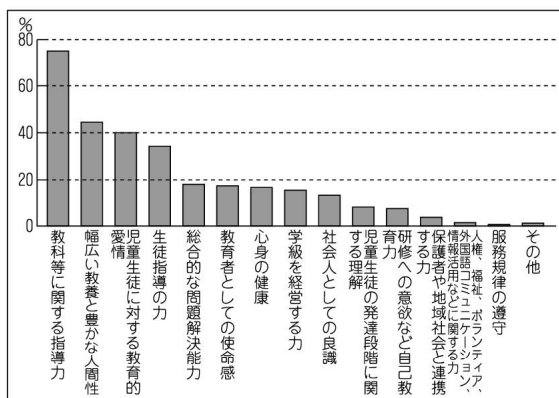
(3) 調査内容

- 現在の意識 ○教員として最も必要な資質・能力
- これまでの教職における歩み（満足感、行き詰まり感）
- 教職に対するやりがい
- 今後5年以内の目標 など11の設問内容

(4) 調査結果（抜粋）

① 教員として最も必要な資質・能力

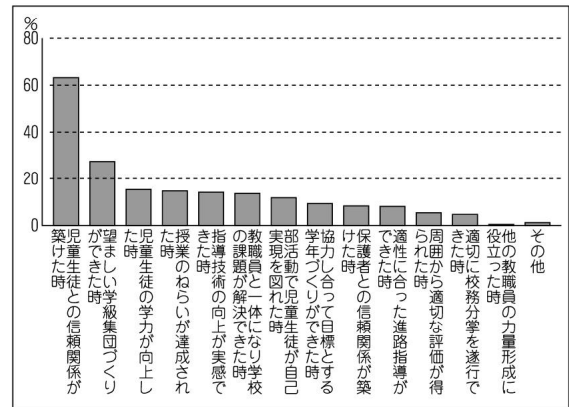
※複数回答



「教科等に関する指導力」を75.2%と、最も多くの先生方が「教員として最も必要な資質・能力」として意識している。次いで、「幅広い教養と豊かな人間性」「児童生徒に対する教育的愛情」「生徒指導の力」の順であった。

② これまでの教職における歩み（満足感）

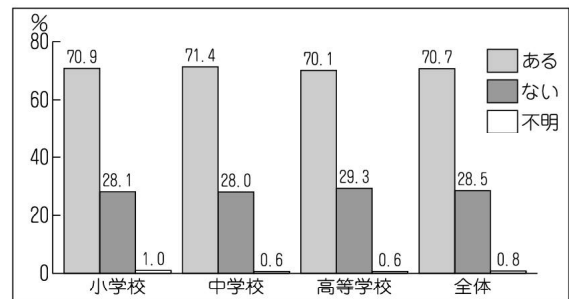
※複数回答



「児童生徒との信頼関係が築けた時」が63.2%と、最も多くの先生方が「教職における満足感」として意識している。次いで、「望ましい学級集団づくりができた時」であった。

③ これまでの教職における歩み（行き詰まり感）

(ア) 行き詰まり感の有無（校種別含）

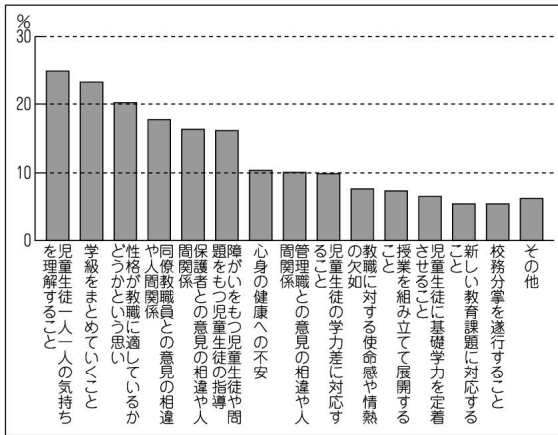


これまでの教職において、行き詰まりを感じたことがあるかどうかについては、全体の7割以上の先生方が、「行き詰まりを感じたことがある」と回答している。また、それは、校種別に見ても同じような割合であった。

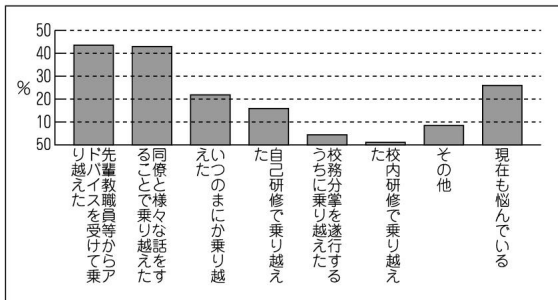
(イ) 行き詰まりを感じるもととなったこと

行き詰まりを感じるもととなったこととして意識しているのは、「児童生徒一人一人の気持ちを理解すること」「学級をまとめていくこと」などであった。それらの項目は、「満足感」としても高い割合で選択されている。

※複数回答



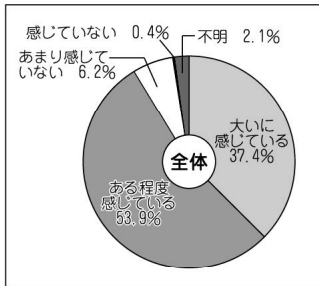
(ウ) 行き詰まりを感じるもとなったことをどのように乗り越えたか ※複数回答



多くの先生方は、行き詰まりを感じるもとなったことを、先輩教員等からアドバイスを受けて、同僚と様々な話をしたりすることで乗り越えている。しかし、3割弱の先生方は現在も悩んでいる。

④ 教職に対するやりがい

教職に対してどの程度やりがいを感じているかについては、「ある程度感じている」の割合が

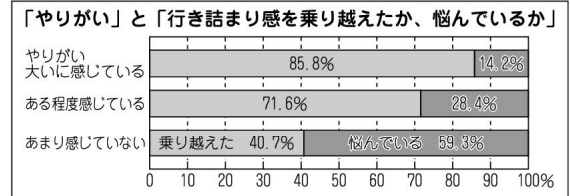


53.9%と一番多く、次いで「大いに感じている」37.4%、「あまり感じていない」6.2%の順であった。

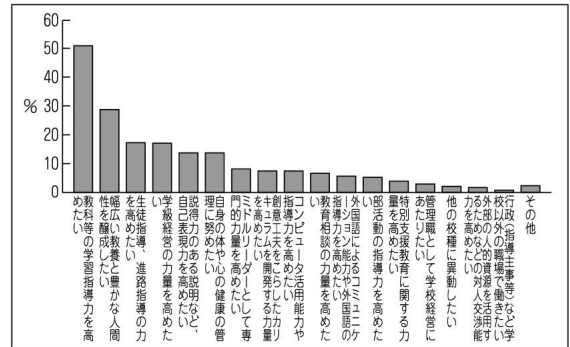
⑤ 教職に対するやりがいと行き詰まり感との関連

「やりがいを大いに感じている」先生方は、「行き詰まり感を乗り越えた」割合が高く、「や

りがいのある程度感じている」「あまり感じていない」先生方は、「悩んでいる」割合が高くなっている。



⑥ 今後5年以内の目標 ※複数回答

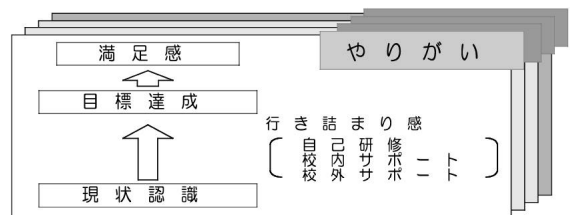


「教科等の学習指導力を高めたい」を50.4%と、最も多くの先生方が今後5年以内の目標としている。次いで、「幅広い教養と豊かな人間性を醸成したい」を目標とする割合が高かった。

3 まとめと考察

先生方は、自分の資質・能力を把握し、目標を定め、その目標達成に向けて努力している。その中で、時として行き詰まりを感じ、悩んでしまうことがある。その行き詰まり感を乗り越えるためには、自分自身の力量を高めるための自己研修に励むことが大切である。また、校内や校外の組織としてのサポートも重要である。

行き詰まり感を乗り越え、目標を達成し、満足感を得ることによって、先生方の資質・能力はさらに向上する。また、教職に対するやりがいをより一層感得することができる。その一連の経験を繰り返すことによって、教師として人間として大きく成長していくと考える。



学校評価を通じた学校組織活性化の在り方 ～学校組織活性化の手だてとしての「実践プログラム」の開発～

学校評価研究チーム

1 学校目標の実現と学校組織活性化

(1) どのように学校組織活性化を図るか

学校評価とは、学校が学校としての機能をどれだけ果たしているかを総合的・客観的に評価し、学校改善に生かすことです。

そのためには学校評価を、年度の重点内容である『学校経営・運営ビジョン』作成を起点に『学校経営・運営ビジョン』を実践し、振り返り、改善に生かしていく全体的なシステムの中で確立しなければなりません。

その中で大切なのは、個々の教職員が校務分掌などの学校運営全体と密接な関わり合いを持ち、組織的に実践することです。「児童生徒の望ましい変容」という学校評価の最終的な目的を実現するためには、学校が組織体として十分に機能しなければなりません。

そこで今年度は、『学校経営・運営ビジョン』の実現を図るための学校評価の取組みを通して、学校組織をどのように活性化していくかについて研究を進めることにしました。そして組織活性化の具体的な手だてとして「実践プログラム」を開発し、その有効性を研究協力校で検証することができました。以下に研究の実際を説明します。

(2) 学校組織活性化に関する意識調査

研究を進める前提として、学校組織や学校評価に対する先生方の意識調査を以下の要領で実施しました。

○調査対象：小・中・県立学校16校、635人の教職員

○実施時期：平成17年8月～9月

○調査内容：「教職員個人」「教職員相互」「分掌組織、校務」「学校評価全体」の四つの観点からなる22の質問項目

(3) 学校組織活性化における課題

この調査結果から、学校組織に関して調査内容の四つの観点ごとに、次のような課題が明らかになりました。

- ①「教職員個人」：個人の取組みが学校に反映されているという実感が少ない。
- ②「教職員相互」：力量を高め合う場があると感じている意識が低い。
- ③「分掌組織、校務」：学校には組織や校務の見直しの動きが少ないと感じている。
- ④「学校評価全体」：学校評価の意義は理解しているものの、『学校経営・運営ビジョン』と教職員個人の目標が結びついていない。

2 学校組織活性化の手がかり

これら四つの課題を踏まえ、学校評価を生かして学校組織の活性化を促進するための手がかりを、以下のように得ることができました。

- ①教職員が学校の取組みに積極的に関わろうという意識を養う。(学校経営への参画意識)
- ②教職員どうして課題を共有し、校内組織を生かした協働的な実践を図る。(課題の共有と協働的な取組み)
- ③実践事項の重点化による校務の見直しと組織の改廃をすすめる。(校務の見直しと組織の改廃)
- ④具体的な実践に結びつく『学校経営・運営ビジョン』をつくる。(『ビジョン』と実践の関連づけ)

教職員個人や分掌組織の教育活動は、『ビジョン』という共通の目標によって協働の取組みができるようになります。従って『ビジョン』の内容は具体的で評価の視点まで盛り込まれたものであり、それに基づいて分掌組織や教職員が、具体的な目標や手だてを設定できることが

(表) 学校組織活性化の手だてとしての「実践プログラム」

対 象	手がかり	実践プログラム
教 職 員 個 人	参 画 意 識	○ 『学校経営・運営ビジョン』に基づいた個人・組織目標の設定
教 職 員 相 互	情 報 共 有、協 働	○ 「新規の『学校経営・運営ビジョン』づくり」 ○ 「調査結果から次の実践へ」
分 掌 組 織、校 務	組 織、校 務 の 見 直 し	○ 「『学校経営・運営ビジョン』による分掌組織の見直し」 ○ 「『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査と自己点検」
学 校 評 価 全 体	『ビジョン』と 実 践 と の 関 連	○ 「『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査紙づくり」 ○ 「『学校経営・運営ビジョン』改訂の在り方」

必要となります。『ビジョン』が重点化され、掲げられた具体的な目標が分掌や教職員の目標と連鎖していくことにより、仕事や分掌組織を見直すことが可能となります。

3 学校組織活性化を図るための「実践プログラム」の開発

以上のような学校組織活性化の手がかりをもとに、学校組織活性化を図るための「実践プログラム」(表)を開発しました。これは、『学校経営・運営ビジョン』を実現するために、教職員の協働を促したり、校務や組織を見直したりするなどの一連の取組みを学校組織活性化の手だてとして示したものです。

各学校の課題を解決し、改善する営みの中で、学校評価を系統立てて進めていかなければなりません。その過程の中で組織活性化の「実践プログラム」を用いることによって、教職員の参画意識を高め、協働を図ることができると考えました。

4 研究協力校での学校組織活性化の実践

この「実践プログラム」に基づいて、研究協力を依頼した福島市内の小・中学校で実践していただき、学校組織活性化に結びついたかどうかを検証しました。

ここでは、「実践プログラム」が機能したA小学校の事例の一部を紹介します。

- ・課題：A小学校での学校評価の取組みにおいて、保護者や児童に行った調査結果がその後の実践にうまく生かされない状況があった。
- ・実践：上記の「実践プログラム：調査結果が

ら次の実践へ」を実践した。教職員の話し合いの場として「学校課題協議会」が開催された。

・成果：協議会実施後、各教職員の課題意識に基づいてグループがつけられ、最終的にはプロジェクトチームとして学校の取組みを協働で考え、実践につなげることができた。

このような一連の取組みによってA小学校では、学校組織が見直され、学校全体が活性化していきました。

これらの具体的な手だてによる実践の結果、各研究協力校では、教職員の学校課題の共有と『学校経営・運営ビジョン』への取組みの意識化を図ることができました。また、教職員個人ばかりではなく分掌組織としての取組みも促進されたことがわかりました。

(本稿の研究協力校での実践については、本号の「連載」に掲載されています。併せて御覧ください。)

5 今年度の研究の成果と課題

今年度の研究では、学校評価によって学校組織を活性化するための手がかりをまとめ、さらに「実践プログラム」を開発することができました。しかし、有効性の検証については今後更に実践を重ね、確かなものにしていかなければなりません。

次年度以降は、『学校経営・運営ビジョン』の実現を図るための学校組織の在り方を明らかにするとともに、学校内外との協働的な関わりによる学校運営の在り方について研究したいと考えています。

(なお、研究成果は平成17年度末までに冊子としてまとめ、各学校にお送りする予定です。)

単位時間に着目したシラバスの実践的研究

～子どもが活用する「学習の道しるべ」としての機能を重視して～

カリキュラム開発研究チーム

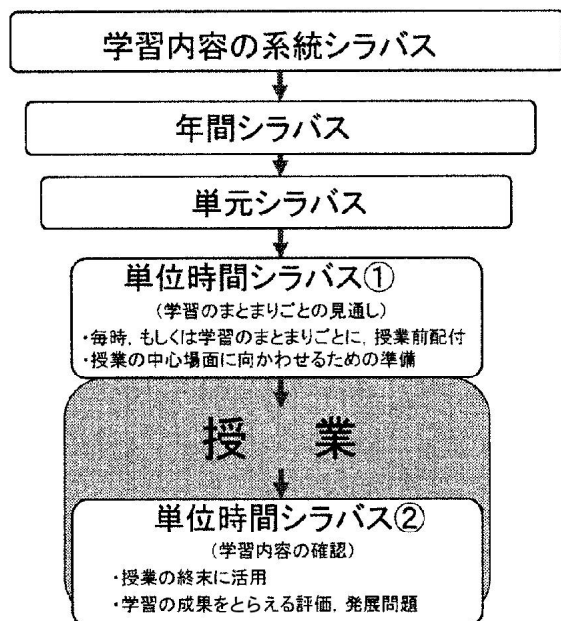
I 研究の趣旨

今年度本チームでは、「子どもの学力向上を図るためには、日々の単位時間ごとの授業を大切にす」という原点に立ち戻り、子どもの学びを支援するシラバス（特に単位時間シラバス）の在り方を実践的に探ろうと考えました。そこで、研究教科を本県の重点課題を踏まえて算数・数学科と設定し、その実践に取り組みました。

II 研究の概要

1 シラバスについての考え方

子どもの学びの中心となる授業の質を高めるために、シラバスを単位時間シラバスまで進めて考え、その在り方を探ることとしました。併せてシラバス作成・活用に伴う教師の授業力向上にも着目したいと考えました。



(1) シラバスを子どもが活用する「学習の道しるべ」とし、次の3点をねらいとして作成・

活用を考えました。

- ・レディネスを整える。
- ・学習の見通しを持たせる。
- ・学力の向上を図る。

(2) 学習者は単元シラバスによって、単元の学習の見通しと目標を知るとともに、本単元に関わる既習の考え方とこれからの学習を概観します。この単元シラバスをもとにして、一人一人の学力の向上を図る授業を目指した単位時間シラバス①②を作成し、活用します。

そのため、まず単元に関わる子どもの実態を把握し、授業を構想します。その子どもの学びの姿をイメージした授業構想をもとにして、シラバスを作成します。

2 単位時間に着目したシラバス

(1) 単位時間シラバス①の考え方

学習者は、授業のねらいに向かうためにシラバスの問いかけに対する答えや既習の考え方をあらかじめ準備（予習）しておきます。

授業者は、学習の中心場面と子どものまとめを見通して、あらかじめ問いかけておきたい内容を考えます。

(2) 単位時間シラバス②の考え方

ひとまとまりの学習後、学習者は自分の目標が達成されているかを確認めます。さらに発展問題に挑戦し、学んだことを深めたり、広げたりします。

授業者は授業の振り返りとともに、この評価を次の授業改善に生かします。

3 研究実践校における授業実践

今年度、研究実践校小学校2校において、6年「分数のかけ算わり算(1)(2)」の単元シラバス・単位時間シラバスを作成・活用した研究授業を実施しました。

(1) 子どもの変容

授業者から「あらかじめ自分で教科書を見てきたり、自主学習に予習をする姿が見られるようになってきた」という変容が報告されました。

また、事後テストでは、授業やシラバスで着目させてきた計算のしくみを問う問題において、事前テストで誤答無答であった65%の子どものうち52%が部分正答に至る結果も見られています。

(2) 教師の変容

授業者からは、「単位時間シラバスの作成を通じた教材研究をしっかりと行うことで、子ども

もたちにとらえさせたいねらいが焦点化された。本時と既習との関連性、本時でとらえる新しい価値など教師の教材のとらえがしっかりとできるようになってきた」という声が聞かれました。

本時のねらいや授業における中心場面、そこでの子どもの学びについて、単元や学年を越えて系統性を持たせ、授業構想に位置づけることの重要性をとらえてきているようです。

Ⅲ 今後の研究推進に向けて

本研究は、現段階では研究途上にあります。今、学習意識との関係も含めて、分析的にこのシラバスの有効性を探っているところです。

次年度は、小・中の学びの連続性を踏まえた授業づくりも視野に入れ、シラバスの在り方を実践を通して研究していきたいと考えています。なお、詳細は研究紀要をご覧ください。

◇授業と単位時間シラバス①②の実践例

指導過程

本時の目標：整数と小数の計算において、分数の形に直しと効率的に、正確に計算することができることを考えることができる。

学習内容・活動	授業者の授業計画・達成基準	子どもの学習活動の予想
1 問題を知り、解く。 ① 問題文をよみ、問題を整理する。 ② 分数のかけ算の式をたて、計算する。 ③ 15 × 14 × 42 ÷ 25	① 問題文、給付問題を、その計算の仕方を説明する。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25	① 問題文をよみ、問題を整理する。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25
2 本時の課題をとらえる。 ① 分数のかけ算の式をたて、計算する。 ② 15 × 14 × 42 ÷ 25	① 分数のかけ算の式をたて、計算する。② 15 × 14 × 42 ÷ 25	① 分数のかけ算の式をたて、計算する。② 15 × 14 × 42 ÷ 25
3 分数に直し、計算するよさを確かめとらえる。	① 分数に直し、計算するよさを確かめとらえる。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25	① 分数に直し、計算するよさを確かめとらえる。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25
4 課題問題を解く	① 課題問題を解く。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25	① 課題問題を解く。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25
5 学習のまとめをする	① 学習のまとめをする。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25	① 学習のまとめをする。② 分数のかけ算の式をたて、計算する。③ 15 × 14 × 42 ÷ 25

単位時間シラバス①

1 くみのをして計算しよう(発展)

15 × 14 × 42 ÷ 25 の答えを求めるときどうすればいいだろう？

この学習で
(こうなりたい)
簡単に計算するためのしくみがわかる。
分数の性質がよくわかる。

どのように考えれば計算ができるのだろうか？
整数、分数、小数はどのような関係があるのかを見ながら、ノートに書き出しておこう。
※ 5年内の「分数と小数、整数の関係」
整数、分数、小数の関係や分数の性質がわかるようにしよう。工夫がはかまれているか確かめよう。

単位時間シラバス②

分数のかけ算とわり算を考えよう(発展)

① 工夫して計算しよう。

【問題】 9 ÷ 8 × 4 ÷ 2 = 1

「工夫を入れたら、両方の計算と答えをかきましょ。」

「どのような工夫をしたか、またなぜそのような工夫をしたかをかきましょ。」

「どのような工夫をしましたか？」

「なぜそのような工夫をしましたか？」

答え

[9]

授業づくりに役立つ情報交換を双方向で！ ～教育センターがそのコーディネートを～

情報化推進研究チーム

教育用コンピュータ1台あたり生徒6.5人、高速インターネット接続率83.5%など、学校のIT環境の整備が進められています。^{*1}

本チームでは、このIT環境を活用した授業の質的向上をめざし研究を行っています。

これまでに、授業づくりに役立つ資料として「ふくしま教育情報データベース」、授業におけるIT活用の事例として「ITを活用した授業実践事例集」、指導にあったコンテンツを探すためのリンク集として「授業に役立つWebサイト集」、また、これらを収集したポータルサイト「ふくしま教育情報ねっとわーく」を構築してきました。さらに、学校と連携して、その支援のあり方を明らかにするため、「先行的な授業研究」として音楽科と総合的な学習の時間の研究を実践的に行ってきました。

1 研究課題

これまでの研究の課題として、作成されたコンテンツが授業改善に必ずしも十分活用されていないことがあげられます。これは、コンテンツの存在が情報として行き渡っていないこと、コンテンツ数が十分ではないために多様な指導に対応できていないことが原因として考えられます。また、作成されたコンテンツに対する先生方の活用意欲を高めることができないことも原因の一つです。

実際に活用する先生方に内容を理解していただき、多様な指導に対応できるようにコンテンツの数を充実させ、積極的に活用していただくには、その研究やコンテンツの構築により多く

の教員が関わるのが重要であると考えます。そこで、学校と教育センターが、学校と学校が、授業づくりに役立つ教育情報を双方向で交換・共有していくシステムの構築を目指し、研究を実践的に進めていくこととしました。

2 今年度の研究内容

双方向での情報交換を行うには、教育センターがコーディネーターとなって、授業づくりに役立つ企画を立て、学校からの情報提供という協力を得なければなりません。

① 「現職教育のテーマ」検索サイトについて

双方向で情報交換を実現するためには、各学校にある教育情報を教育センターが収集し、提供していくという方法が考えられます。そこで、各学校の現職教育のテーマに注目しました。この収集により、各学校の指導における問題意識が明らかになり、各学校の研究教科、テーマ、研究方法を共有することによって学校間の研究交流が可能になると考えました。

「ふくしま教育情報ねっとわーく」に下図のようなアンケートフォームを構築し、各学校の協力をいただき、一覧にまとめるシステムを構築しました。収集できたテーマは、加工して検索できるようにしたものが、「福島県『現職教育テーマ』検索サイト」です。

例えば、「シラバス」で検索すると研究している学校名、そのテーマ、研究の方法が検索でき、研究校間で連携した研究が可能になります。





福島県『現職教育テーマ』検索サイト

同様に、総合的な学習の時間のテーマも、各学校の協力を得て収集しました。現在、教育センターのWeb サイトから「福島県小学校・中学校『総合的な学習の時間テーマ』検索サイト」として提供しています。



『総合的な学習の時間テーマ』検索サイト

例えば、小学校では、「川」をテーマに地域社会や自然環境を総合的な学習の時間に調べることがあります。同じ研究をしている学校を検索することで、川上と川下の環境を比較する交流学习に発展させることが可能になります。

② 各学校のメールアドレスの収集について

教育センターと学校、学校間の双方向での情報交換において、メールの活用は大変有効な手段です。そこで、小学校・中学校のメールアドレスを集めることにしました。

現職教育のテーマ同様に、アンケートフォームを構築し、各学校から入力協力をいただき集めることができました。このアドレスを活用して、現在、各学校との双方向での情報交換を試行しているところです。

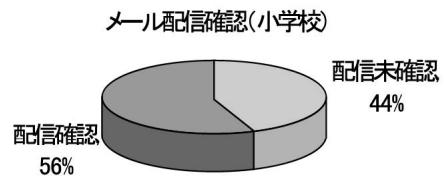
③ 「教員ネットワーク」の構築について

IT ネットワークを活用して、よりよい指導方法を追究するために、「算数科・理科教員ネットワーク」を構築し研究を行っています。授業案の提案、協議により、授業づくりに役立つ情報が双方向で提案されています。詳細は、情報化推進研究チームの連載をご覧ください。

3 今後の取組み

① メール活用による情報交換の拡大

現在メールにより各小学校の算数科主任の先生方と情報交換を試行的に行っています。メールの配信状況を確認するため、小学校中学校にメール受信の確認をお願いしたところ、小学校・



中学校とも、約55%の学校で確認できました。また、メールの活用では、確認できたメールの

62%が初日に確認できたという即効性が確認できましたが、現実性が低いこともわかりました。より多くの学校との情報交換のため、メールの送受信を確実にしていく取組みが必要だと考えます。

② 教員と教員の「ネットワーク」の構築

より有効な教育情報を共有できるようにするためには、福島県全域をカバーする教員と教員の「ネットワーク」を確立していくことが必要です。教育センターが有効な企画を行い、情報が授業改善につながると認識できるような情報化推進を目指します。

※1 文部科学省「学校における教育の情報化の実態等に関する調査(中間調査)結果」より

カリキュラムセンター活用状況

昨年7月1日に、東北地区の他県に先駆けて開設した「カリキュラムセンター」は、開設以来県内の先生方や市町村教育委員会のニーズに応じて幅広く活用されています。

ここでは、カリキュラムセンター開設後6か月の間にどのような要請や依頼があり、それらの要請等にどのように応じたかなどカリキュラムセンターの活用状況についてお知らせします。そして、カリキュラムセンターへの理解をいっそう深めていただき今後更に先生方や関係機関に活用していただけるようお願いいたします。

来室者の状況

カリキュラムセンター相談室に直接来室して他校の教育計画や校種別の教科書を閲覧したり資料を検索したりする先生方の姿が多く見られました。7・8月の長期休業中には、一日かけて資料等を読みながら自主的に研修する先生方もいました。今後も、授業期間のみならず長期休業中においても研修の一環として幅広く活用していただきたいと思えます。



相談・依頼の状況

学校からの電話やFAX、個人からのメールでの問い合わせや直接来所しての相談や依頼がありました。例えば、市町村教育委員会単位で取り組んでいる学力向上策や学校の現職教育の進め方などについての相談や助言の依頼等です。また、先生方個人で来室し、授業づくりや指導案作成のアドバイスを求めるなどの要請もありました。

先生方個人の相談や学校の現職教育の相談については、担当指導主事が直接対応して授業づくりや研究の進め方について先生方と一緒に考えたりより良い授業や研究になるように実践的な助言をしたりしました。

また、市町村教育委員会からの依頼については、依頼に応じて指導主事等を配置し対応チームを編成して取り組んできました。



資料貸し出しの状況

本センターには、5万5千冊余の蔵書があります。

電話やFAX、メール等でこれらの文献や資料についての問い合わせが多方面からありました。県内においては、市町村教育委員会の教育長や校長、教頭、教諭等、個人での問い合わせや教育委員会や学校からの依頼があり、それぞれの要望に応じて、資料等のコピーを送ったり図書の貸し出しをしたりしました。

また、他県の学校や大学、研究所等からも問い合わせがあり充実した資料等は広く活用されています。

指導主事の派遣

指導主事の派遣については、7月から12月までの6か月間でのべ122名を数え、それぞれの派遣先で指導主事等の講義、助言等を聴いた先生方の数は、6,000名を超えています。

要請の内容は、校内研修会での指導助言が48件（小学校20件、中学校17件、高等学校11件）、市町村単位の学力向上等研修会での指導助言等が26件、小・中教研、高教研での指導助言等が21件ありました。その他に、各種公開研究会等での指導助言の依頼が27件ありました。

参会の先生方からは、適切な指導であったとの評価をいただき、再度派遣を要請する学校等も多くなりました。

本センターでは、事前の計画、実践、事後の相談等にも応じる体勢をとっていますので、次年度以降もぜひご活用いただきたいと思います。

講座聴講制度活用の状況

本センターで実施するほとんどの講座に、各大学の教授を始め著名な講師を招いて研修の充実を図っています。本センターで実施している聴講制度は、著名な講師の講演や講義の時間帯だけセンターへ来て聴講することが可能な制度です。毎月多くの先生方が聴講していますが、特に7月、8月の長期休業中は合わせて205名の先生方が研修の一環として様々な分野の講座の聴講をしました。この制度を活用した先生方からは、多忙な中での研修の在り方として魅力的な制度として好評を博しているところです。

《平成17年度 カリキュラムセンター活用状況集計表》

平成17年7月～12月

	カリキュラムセンター 相談室活用状況				カリキュラムセンター 運営状況			合 計
	来室者 (人)	相談・依頼 (件)	資料貸し出し (件)	小計	指導主事派遣 (人)	聴講者 (人)	小計	
7月集計	90	19	11	120	25	71	96	216
8月集計	104	14	13	131	21	134	155	286
9月集計	101	17	14	132	14	24	38	170
10月集計	84	8	9	101	17	24	41	142
11月集計	98	14	12	124	33	33	66	190
12月集計	51	5	1	57	12	3	15	72
総 計	528	77	60	665	122	289	411	1,076

福島県教育研究発表大会報告

去る2月10日(金)、福島県文化センターにおいて「平成17年度福島県教育研究発表大会」が行われました。

今年度は、これまで2会場分散で行っていたのを1会場にしたことと4つの分科会の発表の中から聴きたい内容を選んで分科会を自由に移動できるようにしたことの2点を改善して実施しました。

全体発表

教育センターからは、「ふくしまの教職意識調査」についての発表が行われました。また、学校の代表として今年度の県教職員研究論文特選に輝いた郡山第二中学校から「学びを創造することのできる生徒の育成」というテーマで発表が行われました。

どちらも時宜を得た内容で、参加した先生方からたいへん良い評価を頂きました。

講演会

2005年度の年間ベストセラー「頭がいい人、悪い人の話し方」の著者であり小論文指導で定評のある樋口裕一氏をお迎えし、「学校教育における話し方・聞き方」と題した講演が行われました。

文化センターの小ホールが満席になり、やむなく立って聴く方もいるほどでした。参加者からは、「もっと聴きたかった」とか「学校で実践してみたい」などの声が多数聞かれました。



分科会

分科会は、小学校分科会、中・高等学校分科会、教育相談・生徒指導分科会、校種共通分科会の4つを設定し、各分科会5つずつの発表を行いました。

小学校分科会では、教科指導、道徳の時間の指導、小・中学校の連携、学力向上拠点校の指導などの多様な取組みの発表が行われました。

中・高等学校分科会では、教科指導と中・高一貫教育の取組みを発表しました。

教育相談・生徒指導分科会では、特別活動、特別支援教育、総合的な学習の時間等における取組みの発表が行われました。

校種共通分科会では、学校評価やシラバスの実践的な取組みや情報教育などの取組みの発表が行われました。

どの分科会場も、参加者の先生方の研修意欲に支えられ大盛会でした。

会場を1つにして聴きたい発表を選んで聴くという新しい方式は、たいへん好評でした。

次年度以降も、先生方が参加しやすく各学校の今後の教育活動に実効ある研究発表大会にしていきたいと考えています。

外部講師の講演から

教育センターの研修では、多くの外部講師のお招きし、講義・講演を行っています。
今回は、11月以降に行われた研修の中から紹介します。

中学校音楽・高等学校芸術科実技講座

「雅楽演奏会」 雅楽演奏グループ 伶楽舎

龍笛に笹本武志先生、箏に田淵勝彦先生、鳳笙に三浦礼美先生、鞆鼓に宮丸直美先生をお迎えして研修が行われました。研修の先生方は、3管2弦3鼓の中から3種の楽器を選んで実際に音を出し、「越天楽」を合奏しました。最後は、講師の先生方に「舞楽陵王」「新撰組のテーマ」等を正装で演奏していただきました。



教育相談実践講座

「学校の新しいカウンセリング
～解決志向のカウンセリング～」

東京大学助手 森 俊夫氏

問題の解決に向けての具体的な援助の在り方について講義をいただきました。後半は、援助資源（リソース）を発見するために、例外に視点をあて、自他の良さに気づき、フィードバックしあう演習を通して、問題の原因探しに終始するのではなく、様々な援助資源（リソース）を使いながら援助していく解決志向の発想を体験しました。



高等学校経験者研修Ⅱ

「キャリア教育の在り方」

筑波大学大学院教授 渡辺三枝子氏

「変化の激しい社会環境の中で、将来子どもたちが自立するために、今、子どもたちにできることは何か。社会は学校での活動の延長線上にあって、社会に出て経験するさまざまな葛藤に対応できる準備を学校でやっていく必要がある。職業だけでなく、地域や家庭でどのような役割を選びどう取り組むか、その結果は個々人で異なり、それがキャリアである」

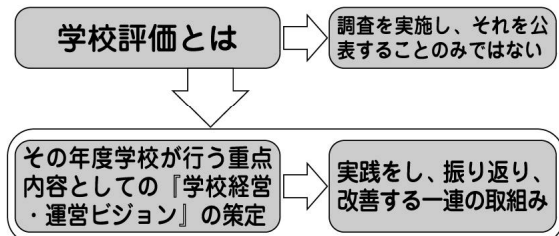
キャリア教育が求められる背景を踏まえ、キャリア教育とは特別なプログラムを指すのではなく、一人一人の教員が自分の教育活動を見直す視点であり、自分の教科で、自分の学校で何ができるかを考え、指導することが大切であるということ学びました。



学校の組織を生かして教育目標の実現を図る ～組織活性化の具体的な方法～

1 学校の改善を促す学校評価

学校評価の主眼は、決して結果の公表に置かれるものではありません。そのねらいは、教育目標をもとに「計画」・「実践」・「振り返り」を行い、評価を学校の取組みの更なる改善につなげることにあります。



このためには、教育目標は抽象的な目標で終始するのではなく、誰にでもわかり、校務分掌や先生方一人一人の具体的な実践に結びつくものでなくてはなりません。

そこで、教育目標をもとに学校の取組みを重点化し、校務分掌や個人の実践につながるよう具体化したものが、『学校経営・運営ビジョン』です。『学校経営・運営ビジョン』を実践する過程で、先生方は関わり合いを密にし、組織としての力を発揮していくことが求められます。

今回は、この『学校経営・運営ビジョン』を起点とした学校評価をうまく活用することによって、学校組織の活性化を図る具体的な方策についてお話しします。

2 連携と協働を促す『学校経営・運営ビジョン』の役割

従来、学校では学級や学年、教科などの分掌組織で先生方が動くため、限られた範囲で業務が完結してしまい、学校全体で大きな目標を共有することが難しい感がありました。

『学校経営・運営ビジョン』に掲げられる重点項目は、分掌組織ごとの縦割りの発想だけでは実現できません。このような意味で、『学校経営・運営ビジョン』は、校務分掌や先生方の連携を促す大切な役割を果たします。また、それぞれの「実践をつなぐ」機会を学校評価の流れの

中に取り入れることで、学校組織に協働性が生まれてくるのです。

3 組織活性化の手だて 一分掌組織、先生方の力を結ぶ

先生方一人一人の持ち味が生かされ、それぞれの力がうまくまとまり、一人ではなし得ない教育活動ができれば、学校は組織として大きな力を発揮したと言えます。

「学校組織の活性化」とは、先生方に学校組織の一員としての意欲とやる気をもたらし、学校組織全体としての動きを高めることです。

ここで、私たち学校評価研究チームでは、学校組織の活性化を図るための手立てを、以下の四つの観点をもとに提案します。

- ①参画意識：『学校経営・運営ビジョン』実現への教職員一人一人の関わり方の明確化
- ②共有と協働：『学校経営・運営ビジョン』に基づいた課題意識の共有と話し合いによる具体的な実践方法の検討
- ③校務・組織の見直し：『学校経営・運営ビジョン』実現のための校務の整理と効率的な組織づくりの検討
- ④学校評価の実効性：具体的な実践に結びつく『学校経営・運営ビジョン』作成のシステムづくり

これらを踏まえた実践を進めることで、学校組織の活性化が図られると考えます。

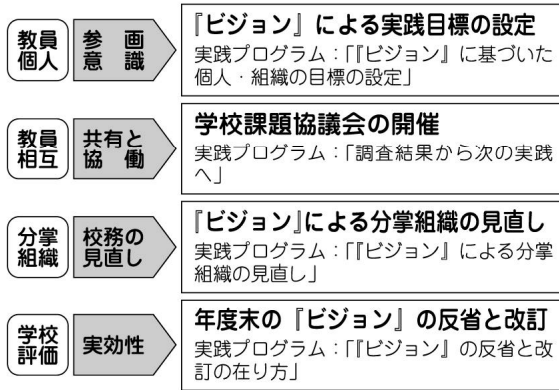
学校評価は、「管理職や学校評価委員会などの委嘱された特定の人だけが関わるもの」という印象をお持ちの方もいるかもしれませんが、しかし、学校評価の大切なねらいの一つは、先生方の学校経営への参画意識を促し、学校組織を活性化させ、組織としての力を向上させることにあります。

4 組織活性化を進める

(1) 活性化実現のための「実践プログラム」の提案

本チームでは、学校組織の活性化を図るための具体的な方法を「実践プログラム」として、上記の四つの観点に基づいて作成しました。「実践プログラム」とは、各学校における実践課題

の解決を図るために、教職員一人一人が考えたり、グループによる話し合いをしたりするなどの一連の取組みを指します。



以下にこれらの「実践プログラム」に取組んだ2校の実践例を紹介します。

(2) 「協働と共有」を促すための手だて

－学校課題協議会の実施－

昨年度A小学校では、児童・保護者を対象にしたアンケート調査の結果を、その後の実践に十分生かし切れませんでした。そこで今年度は中間期のアンケート調査の結果を受けて、「学校課題協議会」を開催し、先生方が演習形式で、『学校経営・運営ビジョン』を実践するための手だてを話し合いました。

具体的には、『学校経営・運営ビジョン』に掲げられた「知」「徳」「体」の領域ごとに教職員全員がグループを編成し、調査結果に基づいた反省と分析を行い、年度後期の実践内容を具体化しました。

この「学校課題協議会」の開催は、先生方が日々の実践について深く考える契機になり、今やらなければならないことを焦点化することができました。

(3) 「校務の見直し」を図る －教育計画作成における校務の見直し－

B小学校では、昨年度、教育計画に基づいて学校評価を行いました。網羅的な反省になっていました。今年度は、学校の取組みを重点化し、『学校経営・運営ビジョン』として掲げたために、やるべき校務の位置づけを明確にすることができ、年度末評価も『ビジョン』に基づく反省ができました。B小学校ではさらに、『ビジョン』に基づいて、従来の教育課程を見直すとともに、来年度に向けて、重要度の低い校務や組織の改廃を進めています。

このように『学校経営・運営ビジョン』の重点項目に従って学校全体の校務を見直すことにより、学校の取組みを焦点化することができ、その結果、ゆとりを作り出すこともでき、ゆとりで生まれた時間を別なことに振り分けることができます。

5 調査のスリム化を図る －調査すべきことと点検でわかること－

C小学校では、週案や各行事の反省、週番日誌など既存の資料を基に、先生方の振り返りの機会を作っています。先生方はそこから自分の取組みを反省し、学級ごとの具体的な目標をこまめに作っています。

学校が教育活動を振り返り、自己評価するための材料は、日々の教育活動のさまざまな場面であり、それをもとに、学校は自らの取組みを点検することができます。

このような自己点検で計りきれない部分は、さらにアンケート調査などによって補うことができ、学校の自己評価はより客観的なものになります。

保護者や生徒へのアンケート調査の質問項目は、あれもこれもと網羅的にならないようにし、『学校経営・運営ビジョン』に基づいて調査項目を絞ったものにします。

大切なことは、評価活動を通して先生方一人一人の課題意識を高めることです。従って自己点検や調査によって明らかになった学校の取組みの成果と課題は、先生方自身が取組みを振り返り、次の実践につなげるための材料にしなればなりません。

6 組織活性化のために －『学校経営・運営ビジョン』が先生方の力を収束し、方向性を与える－

以上のように、『学校経営・運営ビジョン』を起点とした学校評価を進めることによって、協働の場を作り出したり、校務分掌や先生方個人の目標設定や振り返りの機会を設けたりすることができます。また、校務を見直すことによって、学校組織のスリム化を図ることもできます。

学校評価の取組みによって、先生方の力と豊かな発想を束ね、分掌組織や学校全体に大きな方向性を与えて学校組織に活力を生み出すことができます。そのことにより、学校組織が活性化し、最終的に『学校経営・運営ビジョン』の実現を図ることができるのです。

情報化推進
研究チーム

福島県内の教員が、よりよい指導方法を追求する
「教員ネットワーク」を!

前回までに、「教員ネットワーク」について研究の構想と概要についてを示してきました。今回は、算数科・理科それぞれの「教員ネットワーク」について、その後の研究展開についてお知らせします。

1 「算数科教員ネットワーク」

福島市立森合小学校の穴戸先生を代表に、各域内から16名の教員に参加いただき、教育センターが支援するという形で立ち上げ、協議を行っています。

① 指導方法の提案について

参加者から提案いただいた授業案をPDF形式で提供するWebサイトを構築しました。



「算数科教員ネットワーク」Webサイトと指導案例

「教員ネットワーク」という初めての取組みのため、著作権の問題と参加者の意見書き込みのしやすさを考え、提供するコンテンツにはパスワードをかけ、参加者のみ閲覧可能な状態で研究を行っています。(随時参加者を募集中)

② 指導方法改善のために

指導方法の改善を目指した協議を行うため、掲示板をWebサイトに掲載しました。参加者

の多様な問題意識に対応して意見提示ができるように、トピックを増やすことができる掲示板を採用しました。参加者には、まず、自己紹介、



自分の問題意識、日頃の授業の様子を書き込みいただくように、段階を追って書き込みいただきました。

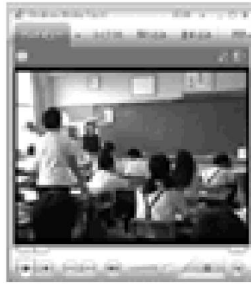
しかし、算数科では協議のテーマを設定しなかつた

ためにより協議が深まらないという課題にぶつかりました。そこで、1週間に一つの授業案を検討していくことにし、現在六つの指導案の検討を終えたところで

「数学的な考え方を育てる授業」「子どもの問いが生まれる授業」「学習の意義をつかませるには」といった協議テーマが生まれ、協議の深まりも見られました。しかし、指導案に対する追究は遠慮からかどうしても甘くなってしまい、実際に顔を合わせた協議ではないという弱さを露呈してしまう部分もありました。

③ 深まりのある協議を実現するために

指導案による検討だけでは、机上の空論になりかねないため、それぞれの授業案による実際の授業をデジタルビデオで録画し、本チームが電子化してWeb上で見ることができるようになりました。

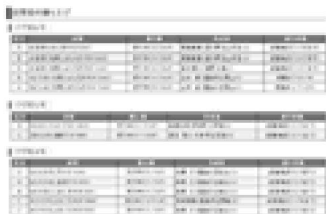


配信中の授業動画

高速接続でなければ見ることができない授業動画ですが、実際の子どもの様子を基にした協議の可能性を高めることができたと考えます。

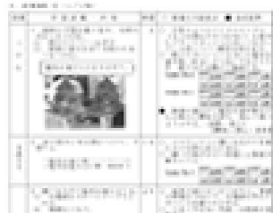
2 「理科教員ネットワーク」

福島市立岡山小学校山本先生を代表に、県内の広域から16名の参加者で「理科教員ネットワーク」を立ち上げました。



Web サイト

① 指導方法の提案について



授業事例

理科では「事象提示のあり方」というテーマを掲げ、授業案により指導方法を提案していただいています。子どもたちに疑問を持たせるような導入のあり方、どのような事象をどのタイミングで提示すればよいか協議を進めているところです。

子どもたちに疑問を持たせるような導入のあり方、どのような事象をどのタイミングで提示すればよいか協議を進めているところです。

② 指導方法の改善のために

授業案提出後、参加者から意見・改善案を掲示板に書き込んでいただきます。その後授業を実施し実際の授業の様子を動画で配信し、さらに協議を深めています。



授業案に対する書き込み

③ 授業の様子を提供するために

動画の配信においては、子どもの顔が鮮明に映らないように、フィルター等の処理を施しました。



配信中の授業動画

動画の掲載により、授業の実際をイメージしやすい

資料が収集できました。今後、有効活用が期待できます。

3 成果と課題

教員ネットワークの研究を通して、県内の先生方が授業づくりに役立てることができる実践的な資料を数多く集め、まとめることができました。動画の掲載により、指導案の意図が実際の授業でどのような効果につながったかを検証することができるので、より実践的な授業研究が可能になると考えます。

会員の協議では、貴重な書き込みにより意見を提示していただいています。しかし、指導方法の改善につながるような協議が十分実現できていない状況です。実際に顔を会わせての協議ではないため、互いの考えがよくつかめないことが原因と考えます。

指導方法の改善につながる、深まりのある協議を実現するには、教員と教員との意志の疎通が基盤となります。今後、顔を合わせた実践報告会等を企画し、基盤の構築を図っていきます。また、教科ごとに多様なテーマに基づいた小集団による協議の場を設定し、「教員ネットワーク」を充実させていく予定です。

算数科教員ネットワーク、理科教員ネットワークそれぞれ、新たな参加者を募集しております。みなさんの参加をお待ちしております。

→ <http://www.center.fks.ed.jp/15ken3/network.html>

元気の出る小学校英語活動の進め方 ～「英語そのもの」に触れ、味わう活動を通して～

教科教育チーム 指導主事 黒須智則

1. はじめに

平成16年6月に実施した「小学校の英語教育に関する意識調査(文科省)」によると、児童の意識の変容のなかで、「英語・異文化への興味・関心」の高まりが顕著に見られる。

一方、教員は「外国人への積極的態度」を、保護者は、「わが子が家で学校のことをよく話ようになった」ことを、児童の変容として特徴的にとらえていることがわかった。

このことは、英語活動が、児童の意識を変え、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成と無縁でないことを示唆している。

そこで、児童一人一人の変化を踏まえ、英語活動の意義や授業実践の在り方について考えた。

身近な話題に関して、絵や身振り手振りを加えることで、英語による双方向のやり取りが自然に成立している。この例では、日本語がほとんど用いられていない。担任教師が進んで英語を使うことで、児童の英語への抵抗感を少なくすることができる。教師がくり返し英語を用いれば、やがて児童はそれを模倣するようになる。



2. 英語活動の実際

(1) 英語を英語のまま理解させる

インタラクション
＜1年生の授業風景より＞

児童: Good morning, Allison!
ALT: How's the weather, today? (屋外を指さして)
児童: くもり。(天気をたずねていることを理解して)
ALT: How's the weather? (本当にそうかなという顔で)
児童: くもりと あめ。(思案して、正確に答えようとしている)
ALT: Umm... (英語で答えてほしいと思っている)
児童: はれ。(何を要求されているのかわからず、答えをさぐるように)
ALT: Is it ...snowy? (雪が降っている絵を見せて)
児童: No! (一同自信をもって、異口同音に)
ALT: Is it ...windy? (風が吹いている絵を見せて)
児童: No! (一同自信をもって、異口同音に)
ALT: Is it ...sunny?
児童: No!
ALT: How's the weather, today? (あらためて、屋外を指さし)
ALT: Is it ...rainy?
児童: OK!
児童: Rainy! (分かったという顔で)

(2) 英語の音に慣れさせる

英語学習の入門期に大事なものは、生の英語の発音をそのまま聴いて、身近なものやむすびつけて理解すること、聴いたままの音を、楽しく自然に模倣することである。ALT でなければ、ビデオやCD で英語を聴かせる。その際、聴き取れない音や発音しにくい音があってもよい。

教師は、児童に英語を話させるのではなく、児童が自然に話し出す場面を設定する。楽しい雰囲気の中で英語に触れさせる。つまり、「全身動作による言語活動(TPR)」によって体験的に習得した語彙は、長期記憶されるからである。

ウォームアップ
＜1年生の授業風景より＞

大きなクリの木下で

CD: Under the spreading chestnut tree. (CDを聴きながら動作)
Are you ready? Faster, faster!
ALT: Faster! (CDに合わせて同じ動作をはやく行うよう指示)
CD: Under the spreading chestnut tree. (児童は一生懸命やる)
ALT: Are you ready? (さらに速くなることを予告)

歌唱・遊技活動 (TPR)

CD: Red, red, clap your hands.
Blue, blue, clap your hands.
Green, green, clap your hands.
Everybody clap your hands.

Yellow, yellow, stamp your feet.
Brown, brown, stamp your feet.
Pink, pink, stamp your feet.
Everybody stamp your feet.

ビジュアル・イメージ
サウンド・イメージ
動作化(拍手)

ビジュアル・イメージ
サウンド・イメージ
動作化(足踏み)

めりながら覚えよう (TPR) → ビジュアル・イメージ
サウンド・イメージ
動作化(彩色活動)

＜1年生の授業風景より＞

ALT: And let's say red. Color and say red.
児童: Red, Red.
ALT: めりながら、いってみよう。(学級担任が日本語で補足してもよい)
児童: Red, Red. (クレヨンで画用紙に彩色しながら発音する)
ALT: Red, Red, Red. (黒板の模造紙に彩色しながら発音する)
児童: めりながら、めりながら、
児童: Red, Red, Red. (rの音を意識しながら模倣して発音する)

インプットとアウトプット → input 理論

ALT: What color is this?
児童: おどろい。オレンジ。
ALT: Very good. Orange.
児童: オレンジ。
ALT: Orange.
児童: オレンジ。
ALT: Orange.
児童: Orange. (4回聴いて、4回模倣練習)
ALT: Very good.

ALT: Next color is...
児童: パープル。(異口同音に)
ALT: Yes, it's purple.
児童: Purple.
(模倣練習なしで音を復元)

(3) 英語の音に触れて異文化体験させる

歌唱や遊技活動を組み合わせて、英語独特の音やリズムを楽しみながら体感したり、音の違いを味わったりして、英語に親しむことが大切である。また、英語独特の音の変化も、歌唱指導を通して体感させることができる。

「Sing」(音の変化の体験)
＜5・6年生の授業風景より＞

Sound Changes(音の変化)

①つながって聞こえる。(Liaison)
far away, keep it up
②緩音して聞こえなくなる。
at down, stop playing (Elision)
③通った音になる。同化
want you, would you
(Assimilation)

※下線部が音変化の箇所

Sing, sing a song
Sing out loud
Sing out strong
Sing of good things, not bad
Sing of happy, not sad
Sing, sing a song
Make it simple to last your whole life long

Don't worry it's not good enough
For anyone else to hear
Just sing, sing a song
La la la.....
Sing, sing a song
Sing out loud
Sing out strong
Sing of good things, not bad
Sing of happy, not sad
Don't worry it's not good enough
For anyone else to hear
Just sing, sing a song
Just sing, sing a song
Just sing, sing a song
La la la.....

上記の下線部は、音の変化が起こる箇所である。

る。それをふたつの単語としてではなく、ひとつの音のかたまりとしてとらえ、自然に聴いたまま、聞こえたままに児童は歌っている。これは、英語を文字言語としてでなく、音声言語としてあつかう小学校英語活動の利点である。

次に、英語を単語レベルから数語単位の音のかたまりとして聴くだけでなく、ひとまとまりの文として内容を聴き取る活動が考えられる。

下例は、絵本の英文を繰り返し詠唱(chant)することで、英文独特のイントネーションやリズムを体感し、既習の単語の定着を図る。また、既知の単語や場面をもとに、英文の意味を予測させ、絵本のなかの状況や重要な情報を、英語のまま、把握させようとするものである。

Brown Bear (導入)
＜2年生の授業風景より＞

ALT: Brown bear, brown bear, what do you see? (題名を指さして)
児童: Brown bear, brown bear, what do you see? (ALTを模倣して)
ALT: Very good! What do you see? (題名の意味を確認するように)
Brown bear, what do you see?
What color is this? (1年生での学習を振り返り、結び付ける)
児童: Brown! Red! Yellow! Blue!
Green! Purple! White! Black!
...?
(児童がわからない色に出会ってとまどう)

ALT: Orange! (ゆっくりと思い出させるように、先頭を強く発音する)
児童: オレンジ!
(なあんたというように、オレンジと平板にいう)

ALT: Orange! (手振りや辞書を視覚化して、先頭を強く発音する)
児童: Orange! (ALTの手振りや発音を模倣して発音する)

ALT: What color is this? What do you see? (確認するように)
児童: Orange! (児童は自信をもって大きな声で発音する)

ALT: What's today's story, once more time? (題名を指さして)
児童: Brown bear, brown bear, what do you see?
ALT: Very good!

3. おわりに

いずれの事例も、英語を音声言語の側面としてとらえ、日本語のように、自然に発話させようとするものであり、英語そのものの音に触れ、慣れ親しませることをねらっている。英語活動においては、教師そのものが学習者のモデルといえる。教師が間違いをおそれず、進んで英語を用いることが、児童の積極的なコミュニケーションの態度を育てるということを銘記したい。

実効ある組織マネジメントを目指して

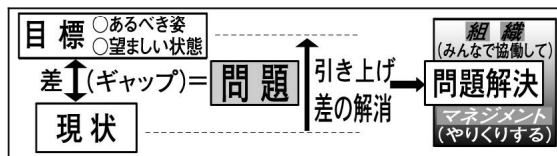
今年度の組織マネジメント関係講座に参加された約250名の先生方から、「自校の先生方にも組織マネジメントを知ってもらいたい」という声が多く聞かれました。そこで今回は、受講された先生方の代表的な下記の感想をもとに、組織マネジメントを実効あるものにするためのポイントについて、問題解決を中心として述べたいと思います。

- ① 問題意識を持って、いろいろと話し合える場がなかったのが、よい機会となった。
- ② 自校の問題点を改めて考えると、いろいろな方面にさまざまな問題点があることがわかった。
- ③ 日頃の問題をステップを踏んで考えていくと整理され、解決策も見えてくるようになった。

1 組織マネジメントは問題の発見と共有から！

感想①からは、教職員同士が問題点に目を向け、コミュニケーションを図る大切さが見えてきます。これらは、学校を組織として機能させる上で不可欠なもので、問題解決の第一段階である「問題の発見と共有」につながります。

ところで、「問題」は下図のように目標と現状との差から推し測ることができます。このことから前回まで述べてきた「目標の明確化と客観的な現状分析」の重要性がわかります。

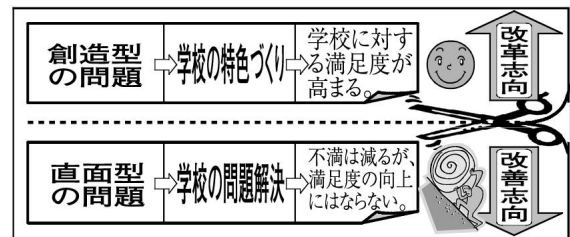


問題が判明した後は、その問題を教職員で共有することが必要になります。「三人寄れば文殊の知恵」と言われるように、数人で始めたことが渦を巻き始め、やがて周囲を巻き込んで学校

改革につながったという話もよく耳にします。これは「トルネード・マネジメント」と言われるもので、できそうなところから、できる人で取り組み、やがては文字通り組織を巻き込んで問題解決にあたるという組織マネジメントの考え方の一つです。

2 問題の質で特色づくりと問題解決を分ける！

感想②からは、学校での多方面にわたる問題の存在がうかがえます。表出しているさまざまな問題は、下図のように、「創造型の問題」と「直面型の問題」に分けて整理するとわかりやすくなります。



「創造型の問題」は「改革志向」となり、学校の特色づくりにつながります。また、「直面型の問題」は「改善志向」となり学校の問題解決につながります。ここでの注意点は、「特色づくり」と言っても、他と違ったもの、他にないものを単なる思いつきで花火のように打ち上げていくことではないということです。

「それじゃ、どうすりゃいいの？」となるわけですが、感想③にあるように、「問題の明確化→解決策」というステップを大切に、具体策の検討を試みるとよいでしょう。

3 思考法・発想を生かしたマネジメント術！

次に、「どうすりゃいいの？」のヒントをさしあげましょう。「マネジメント術」と書きました

が特殊な魔法なるものではありません。ここからは、みんなで知恵を出し合って問題を明確にし、解決策を見いだしていくことが大切になります。これがまさに「問題に対して組織的にマネジメントしていく(やりくりしていく)」ということなのです。その際、以下に示す思考法や発想法と言われるいくつかの手法を用いることで、マネジメントしやすくなります。

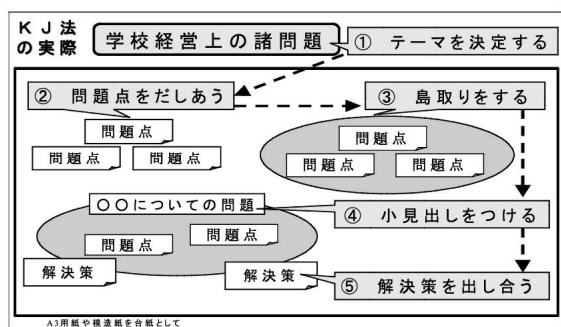
(1) まずは「発散思考」のブレインストーミングで！

まずは、問題発見とアイデア創出の段階です。その際、発散思考のブレインストーミングの考え方が役立ちます。下の表の4つのルールをふまえ、問題に対して各々が考えを出し合い、新しいアイデアを数多く得ていきます。

★ 4 つ の ル ー ル	質より量	関係がなさそうでも、とにかく出す
	自由奔放	こんなことを言ったら？、と考えない
	批判の禁止	それは変だよ、などは禁句
	相乗り歓迎	そうか、それからするとどうも考えられるぞ

(2) 次は「収束思考」のKJ法で！

次は、出された問題点やアイデアを収集・整理し、共通のものにしていきます。その際、KJ法が役立ちます。下図の①～⑤の手順でグループ化、構造化して考えを収束させていきます。



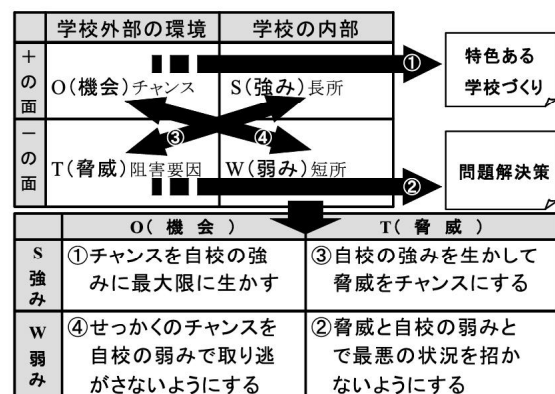
(3) そして学校の特色づくりにいかすSWOT分析！

上記の(1)(2)は問題解決のための討議法であり、主に学校内に目を向けた改善志向のものです。しかし、組織マネジメントの最大のポイントは「変化が激しい環境と折り合いをつけながら、

自ら積極的に変化していくこと」にあり、学校外の環境に目を向けることが大切になります。そこで役立つのが、学校内外の要素をプラス面とマイナス面に分けて考えるSWOT(スウォット)分析です。これは、英単語の頭文字を組み合わせた名称で以下のような意味です。

		学校の外部		学校の内部	
+ 面	O	機会(チャンス)	S	強み	学校の得意分野 長所
	Opportunity	学校に支援的に働く場合や場面	Strength		
- 面	T	脅威(困りごと)	W	弱み	学校の不得意分野 短所
	Threat	学校に阻害的に働く場合や場面	Weakness		

この4つの視点で学校内外の環境を分析・把握します。分析結果をさらに下図の①～④の矢印のようにクロスして考えると、さまざまな特色づくりや問題解決の方策が見えてきます。



最終段階は、どの方策から取り組むか、その順序について考えます。まず、上記の分析結果から出てきた方策を、着手の難易、効果の高低で並べ、着手が容易でなおかつ効果が高いという視点で順序づけていくと、どの方策から取り組むべきかが見えてきます。

4 おわりに

3回にわたり、「明確なビジョンをもつこと」、「ビジョンに基づくPDCA」、「実効あるものにするための具体的手法」を述べてきました。

平成18年度のスタートを切るにあたり、「自分から、そしてやれるところからの組織マネジメント」を学校づくりに生かしていただければ幸いです。まずは問題意識を持つことから！

情報教育チーム

情報モラル教育の充実に向けて ～7つのポイント～

1 はじめに

前回までは具体的な場面をもとに指導のポイントを紹介しましたが、今回は情報モラル教育の実践を充実させるための「7つのポイント」を紹介いたします。（参考例としてカリキュラムセンターを通して教育センターが支援した学校の事例を取り上げています。）

これから情報モラル教育に取り組もうとしている学校はもちろん、既に取り組んでいる学校にとっても、参考になる内容になっています。ぜひご覧ください。

2 充実させるための7つのポイント

(1) 教育計画への位置づけを工夫する

情報モラル教育を充実させるためには、卒業まで見通した指導内容を教育計画に位置づけることが重要です。

ある小学校では、現在大きな問題になっているメールや掲示板、チャット等でのトラブルを防ぐために「ネット上でのコミュニケーションのルール・マナー」の学習を3年生から6年生の共通の課題として取り組み、その他の指導内容も学年を見通しながらバランスよく配置しています。

また、ある町では小・中学校が連携し、小・中学校9年間を見通した情報モラル教育の指導計画作成に取り組んでいます。

昨年6月に実施した情報モラル研修で配布したテキスト「情報モラルの理解と指導」を参考にしながら、各学校の実態に合わせて、卒業までに情報モラルの指導内容を一通り学ぶことができるように工夫してください。

〇〇小学校情報モラル年間指導計画（例）

	①プライバシー 個人情報	②肖像権・著作権	③情報の信頼性と 有害情報	④コミュニケーション上の ルール・マナー	⑤健康上の問題	⑥情報社会の セキュリティ
3年	社会のルール、個人情報			ネット上のルール（メールの送信元・宛先） 送信元・宛先	匿名（コンピュータの使 い方）	
4年	電子メール（送信元・宛先） のルール、個人情報			ネット上のルール（メールの 送信元・宛先） 送信元・宛先	匿名（インターネットで 検索）	
5年	匿名（インターネットで検索） のルール、個人情報			匿名（インターネットで検索） のルール、個人情報	匿名（インターネットで検索） のルール、個人情報	
6年	匿名（インターネットで検索） のルール、個人情報			匿名（インターネットで検索） のルール、個人情報	匿名（インターネットで検索） のルール、個人情報	

※情報モラルを効率的に導入するためのポイント
小学校は社会的な学習の時間を中心に位置づける計画がよい。中学・高校では、校内や校外情報を中心とした位置づけることが多くあるが、生徒指導が関係している内容は掲示板やメール、携帯電話等は、学級担任が指導できる特別活動（ホームルーム等）に位置づけることを勧める。

(2) 体験的活動を重視する

情報モラル教育を実践する上で大切なことは、児童生徒に体験させながら気づかせたり考えさせたりする機会を多く設定することです。直接的な体験は危険を伴う場合が多いので、疑似的に体験できる教材を積極的に取り入れるといいでしょう。掲示板やアンケートフォーム、チャットの概要は「情報モラル教材2005」で体験できます。（※ただしスタンドアロンで動作。）体験的教材の導入は児童生徒のリテラシー格差を解消し、学習をより深めることが可能になります。

II S+Autoaspによって校内専用の掲示板等を設置し授業で活用している学校では、リテラシーが低い児童生徒に対しても大きな成果を挙げています。（校内専用の掲示板等の設置方法は「ネットワーク活用講座」で取り扱っています。）



(3) 積極的に話し合い活動を取り入れる

「～をしてはいけない」といった内容を教師が一方的に指導した場合、児童生徒の考えがあまり深まらず効果が薄れてしまうことがあります。一人一人が情報モラルを自分の問題として考え、より深く理解していくためには、学習過程の中に話し合う活動を積極的に取り入れ、互いに考えを深め合う時間を十分確保することが大切です。このとき教師は児童生徒に話し合いを任せきりにはせず、「気づかせたいこと・考えさせた

段階	学習活動	指導上の留意点・評価
展開	3 チャット等の書き言葉を 使ったコミュニケーションで、 気づけなければならぬこと を話し合う。	○チャット以外にもネット上には書き言葉を使った コミュニケーションがあることに気づかせる。 〈気づかせたいポイント〉 ・人を傷つけることはできない。（誤解中傷） ・表情が見えないからこそ、相手の気持ちを考える。 ・丁寧な言葉で書き、相手ももらったように感じる。 ・個人情報を勝手に書かない（自分、友達）

いことは何か」という点を明確にし、学習のねらいに迫るために常に支援していくことが重要です。

ある学校では学習指導案の中に「気づかせたい」「考えさせたい」ポイントを明示し、学習のねらいを達成できるよう工夫しています。

(4) 教師の説話を効果的に使う

児童生徒が気づいたことや考えたことをさらに深めたり、学習活動の中で気づくことができなかった部分を補ったりするには教師の説話が効果的です。実際にインターネット上のトラブルで困っている人達の事例は、児童生徒の心に大きく響いてきます。インターネット上にはたくさん事例がありますが、実際にその中から適切な事例を選ぶのは大変です。このような場合はふくしま教育総合ネットワーク（FKS）が毎週火曜日にメールで配信している「けやき教育 News」を活用することを勧めます。毎週情報モラル教育に関する最新かつ重要な情報を受け取ることができ、指導する時間が十分にとれないときなど、紹介されている事例を印刷し児童生徒に読ませるだけでも効果があります。（けやき教育 News は教職員であればどなたでも無料で読むことができます。申し込みは itce@ml.fks.ed.jp 宛に学校名・氏名・メールアドレスをご連絡ください。）

(5) 指導過程を工夫する

インターネットをあまり経験したことがない児童生徒が掲示板やメール等の学習をしたときに気をつけなければならないことは、授業でマイナス面が強調されたために「インターネットは危険、怖い＝インターネットは使わない方がよい」というイメージを持ってしまうことです。そうすると情報活用能力を育成するといった情報教育のねらいからもはずれてしまうことにもなりかねません。このようなことを避けるには、ネットワークを活用する良さを十分に体験した後に、活用する上で気をつけなければならないことを考えさせるなど「指導内容の順序を工夫する」ことが必要です。また、時間的に余裕がないために児童生徒が考える時間がうまく取れず学習にあまり深まりが見られなかったという話も聞かれます。これも時間的に「ゆとりのある指導過程」にすることで解決することができます。

ある学校では、児童生徒があまり経験していない題材（メール・掲示板等）を扱うときには、1題材を2時間扱いにし、ネットワーク上のコミュニケーションの良さを体験した上で、気をつけなければならないことを考えるように工夫

しています。

(6) 学びの足跡を記録する

学習カード等に自分の考えを記録することは、児童生徒が考えを整理しながら理解を深める上でとても大切な学習活動です。また、教師が児童生徒の実態や変容を捉えたり評価したりするときにも有効な手立てです。シンプルなものでも良いので、簡単に記入できる学習カードを準備し、授業で活用しましょう。これらのカードはきちんと

保存しておくことで学習の振り返りにも役立ちます。

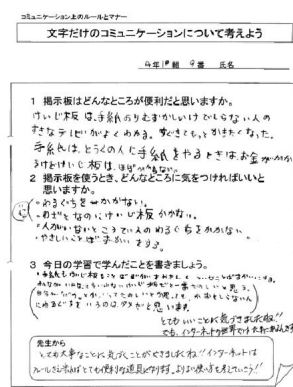
(7) 情報モラル教育全体のまとめを行う

情報モラル教育は、情報社会に参画する態度を育てることをねらいとしています。実践が進んでくると、「携帯電話等で気をつけること」「個人情報の保護」などの場面ごとに学習することが多くなり、それぞれの場面での適切な行動や対処の仕方を学ぶことはできません。しかし、「これから情報社会で正しく行動するためのどうすればいいのか」といった情報モラル教育の本質的なねらいを考えさせることが不足しがちです。そうならないためには各校種ごとに今まで情報モラルについて学んだことをまとめる学習に取り組みせるとよいでしょう。

ある学校では、情報モラル教育のまとめとして「私たちのインターネットルールを作ろう」という単元を設定し、そこで作成したルールを校内や地域へ発信する取り組みをしています。今まで学習してきた内容を振り返り、自分たちにとって情報モラルとは何なのかということを考えさせています。

3 おわりに

来年度の情報モラル教育の充実に向けて、皆さんの学校では着々と準備が進んでいると思います。ぜひ今回挙げた7つのポイントを実践に役立てていただきたいと思います。ここで紹介した実践例の他にも、県内には素晴らしい実践を行っている学校がたくさんあります。教育センターでは、各域の小中学校及び県立高等学校の素晴らしい実践例を収集し、各学校に情報モラル教育を実践する上での資料としてお渡しできるように準備をしているところです。ぜひ、そちらも活用してください。



教育相談チーム やる気や自信を高める部活動指導

部活動指導において、今までの指導方法がうまくいかないと感じた経験はありませんか。今回は、技術面や体力面の練習をベースにしながらも、心理的側面からの指導援助を取り入れることで、生徒のやる気や自信を高めた事例を紹介します。

〈事例〉部活動指導に悩む古川先生の場合

古川先生（数学・33歳男性）の勤務する高校は、部活動の活発な学校です。

古川先生が顧問を務める陸上競技部は、部員数20名で、部員の多くは熱心に練習に励み、県大会に入賞する力をもった選手が数名います。ただ、ここ数年は本来の力を発揮できない生徒が増えているのが気になっていました。

古川先生は陸上競技の経験こそありませんが、熱心な指導と面倒見のよさにより、部員からも信頼されています。

古川先生には気掛かりな生徒がいました。名前はフミノリと言い、高校2年生の男子です。中学校時代は野球部に所属していましたが、控えにまわることが多く、試合に出てもピンチランナーという存在でした。ただ、走ることは得意で、チームの中でも1、2番の生徒でした。高校入学と同時に陸上競技部に入部したのです。器用なタイプではありませんが、短距離走の選手として毎日黙々と練習に打ち込んでいました。

ところが、2年生の春季大会が終わった後から、練習を休むようになりました。学校には来ているものの、授業中や休み時間などの様子は元気がありません。「県大会出場」という目標を持って頑張っていたフミノリなのに、

一体どうしたのか？古川先生は、フミノリと話がしたいと思いました。また、これまでの自分の指導方法はどうだったのかと振り返るのでした。



フミノリは、結局一週間練習を休みました。数日後、古川先生はフミノリに話を聞いてみました。すると、レースに対する思いだけが空回りしていること、春季大会で後輩のマサトより記録が悪かったことなど、ショックと強い不安を抱えていることがわかりました。

古川先生は今までの練習方法に何かを付け加えていく必要性を感じました。そこで、指導方法をテニス部顧問の佐藤先生（体育・43歳男性）に相談しました。佐藤先生は指導者講習会等に積極的に参加しながら、技術面や体力面の練習に心理的側面からの指導援助を取り入れ、成果をあげている先生の一人でした。

1 古川先生の気付き

古川先生：佐藤先生、ちょっといいですか？

佐藤先生：何だい？

古川先生：実は、部活動指導に行き詰まっています…。

佐藤先生：ん？どんなところ？

古川先生：どうも今までの指導法では通用しない気がするんです。生徒たちは真面目に練習しているんですけど…。何となく力を発揮していないような…。一生懸命なフミノリも練習を休んでいる状況で。どうしたらいいものか…。

佐藤先生：…メンタルトレーニング、やったことある？

古川先生：メンタルトレーニングですか。

佐藤先生：テニス部でも使っているけど、ここぞという時の集中力や、緊張感を和らげるのに効果があるよ。

古川先生は佐藤先生にいくつかの手法を教えてもらい、テニス部指導の場面を見学させてもらうことにしました。

〈佐藤先生のテニス部指導の場面〉

A 子：(スマッシュするが、アウトになる)

佐藤先生：よし、OK！OK！その積極性！！

A子のいいところは、今のように積極的に攻めるところだよ！！

A 子：はい。ありがとうございます。

B 子：(サーブエースを決める)

佐藤先生：よし！そのタイミング忘れるな！

B 子：気持ちよく振り切れました。

「なるほど！こういうことか！！」

古川先生はテニス部の練習を見学することで、次のようなヒントを得たのでした。

- まず、選手のいい点に注目する
- 指導する際は、何が重要かを問いかけ、そのポイントになる点を生徒から引き出し、意識を高める
- 教師側からプラスの言葉かけをタイミングよく行う

2 フミノリへのかかわり

古川先生は、佐藤先生の部活動指導を参考にしながら、これからの指導法について考えました。一方、フミノリは、古川先生と話をした翌日から練習に参加するようになりましたが、相変わらず元気がありません。

そこで、古川先生はフミノリへの指導援助を次のような視点から行うことにしました。

- フミノリが自分自身の強みを知るための働きかけ
- フミノリが具体的に練習目標を設定するための働きかけ

数日後、古川先生は練習を終えたフミノリに話しかけました。

古川先生：頑張っているな。

フミノリ：みんな順調に練習メニューをこなされていて…。取り残されるようで…焦っています。

古川先生：筋肉は張ってないか？

フミノリ：ええ、かなり。それでも、練習しないと…。

休んでいた間の遅れを取り戻そうと気はあせ

り、以前と同じように思いばかりが空回りしているフミノリでした。そこで、古川先生は、フミノリのプラス面に視点をあて、彼に強みを自覚させようと次のように働きかけました。

〈フミノリが強みを知るための働きかけ〉

古川先生：フミノリの強みって何かなあ？

フミノリ：強みですか…、筋力かな…。

古川先生：スタートダッシュもいいよな。

フミノリ：…………。

古川先生：心配するなよ。これから、一緒に探していこうよ。必ず、あるから。

やはり、フミノリからは自分の強みについて多くは出ませんでした。そこで、古川先生は、これまでにうまくいっていたときのことを思い起こし、自分の強みを探してみないかとフミノリに提案するのです。

それから一週間経ったある日、練習前にフミノリの方からこんな話が聞かれました。

フミノリ：先生、この前の話ですけど…。

古川先生：えっ、何？

フミノリ：けっこう瞬発力ある方だと思うんですよ。

古川先生：なるほど。瞬発力か。

フミノリ：それに、あんまり関係ないけど、後輩の面倒見もいい方かな…？

フミノリは、自分の強みを探し出し、古川先生に伝えることにより、少しずつ元気を取り戻していきました。

〈フミノリが具体的に練習目標を設定するための働きかけ〉

(競技のビデオを見ながら)

古川先生：この選手、いい走りしてるよな。

フミノリ：そうですね。やっぱりインターハイに出ている選手は違うなあ。

古川先生：そうだなあ。

フミノリ：太ももの引き付けが素早いですね。

古川先生：ここ、見てみな。

フミノリ：あ、加速中もリラックスした腕ふりになっています。…こんな風に走ってみたいなあ。

古川先生：今のビデオをイメージしながら練習メニューを考えてみないか？

フミノリ：はい。

古川先生は、その後もフミノリと話し合い、イメージしたことを図や言葉にしてみることをアドバイスするなど、一緒に練習メニューを考えていきました。

これまで「県大会出場」という漠然とした目標のみのフミノリでしたが、そのために何を、どのようにするのか、具体的な練習内容・方法を考えていくのでした。

3 動き始めたフミノリ

放課後、フミノリが、誰よりも早くグラウンドに出て準備運動を始めています。

古川先生：よっ、早いじゃないか。

フミノリ：ちょっとでも多く練習しようかなーと思って。

古川先生：そうか、がんばれよ。

(イメージを取り込み、練習するフミノリ)

フミノリ：ハアハア…。

古川先生：今の腕振りだぞ。あと1本。

フミノリ：はい。

(練習後のグラウンドで)

古川先生：だいぶ、調子があがってきたな。

フミノリ：気持ちよく汗がかけるようになりま
した。

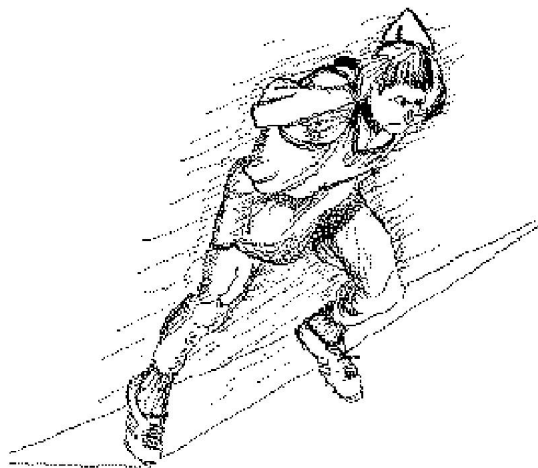
古川先生：そうか。

フミノリ：先生と考えた練習メニューのおかげ
です。

古川先生：そう言ってもらえるとうれしいよ。

フミノリ：コンディションにあわせて、自分の
ペースで練習することが大切なんで
すよね。

古川先生とやりとりするフミノリの姿には、
具体的な目標を見据え、今の自分ができること
を積極的にやろうとする意識の高さと自信が現
れていました。



4 部活動指導への思い

古川先生：この間はお世話になりました。

佐藤先生：最近フミノリ、どう？

古川先生：少し自信が出てきたようです。

佐藤先生：先生のサポートが効いたんだね。

古川先生：今回は、フミノリを通して僕自身も

勉強になりました。

古川先生は、部活動指導の中で心理的な面を
どのようにとらえ、支え、さらに伸ばしていく
かという視点を持ち、実践することの大切さを
実感しました。そして、部員一人一人が自分の
目標に向かって具体的に取り組むための土台と
して、やる気や自信を高める部活動指導を実践
したいと強く思うのでした。

5 おわりに

今回は、部活動指導に悩む古川先生の例を紹
介しました。部活動指導においては、教師が生
徒に技術面や体力面とともに心理的な側面にも
配慮し、バランスを考えた指導をしていくこと
が大切です。また、こうした指導援助を通して、
生徒たちは緊張や不安と上手に付き合うことを
学び、やる気や自信を高めていくと考えます。

なお、福島県教育センターのホームページ
(<http://www.center.fks.ed.jp/>) 上では「緊張への対処の仕方」(『生きる力を育てる授業実践プログラム 中学校編』)、「ストレスとの上手なつきあい方」(『同 高等学校編』)を掲載しています。部活動指導に何か付け加えたいと考えている方にお勧めです。ご不明な点は、教育相談チームまで気軽にお問い合わせ下さい。

◇ 引用・参考文献

生きる力を育てる授業実践プログラム

<http://www.center.fks.ed.jp/19soudan/program.html>

福島県教育センター教育相談チーム編
学校教育相談ハンドブック

<http://www.center.fks.ed.jp/04guidance/handbook.html>

福島県教育資料研究会編
メンタルトレーニングで部活が変わる 図書文化
スポーツ選手のための 心身調律プログラム

大修館書店
ストレスマネジメントフォキッズ 東山書房



概念的知識を獲得する社会科

～単元シラバスの活用と 自己評価活動を通して～

田村市立美山小学校 教諭 高橋 政喜
(平成16年度長期研究員)

I はじめに

これまでの課題解決学習を振り返ると、子どもたちは、見学や調査、インターネットの検索等を通して、意欲的に調べ、解決していました。しかし、調べた結果として得た知識は断片的なもので、それを発表することで学習が完結してしまい、学びは広がりません。このような「調べて、発表する社会科」で、「公民的資質の基礎」が育つのか。このような課題を抱えつつ、長らく実践をしてきましたが、昨年度1年間の長期研修の機会をいただき、理論と実践の両面からこの課題に取り組むことができました。

II 昨年度の研究から

調べた知識を羅列することに終始していた社会科から脱却するためには、その具体的知識（社会的事象）を比較、検討、吟味して新たな知識を構築していく過程が必要だと考えました。これを「概念的知識の獲得」とし、この知識を獲得するための単元計画を作成し、3年生と6年生で実践しました。

1 概念的知識を獲得するための単元計画

概念的知識は、資料の活用、見学・調査、観察、体験などの活動を通して得た事実（具体的知識）から、その意味や特色を導き出した知識、他の社会的事象にも適応できる知識であり、社会に対する見方や考え方につながるものです。例えば、雪国の生活を調べて得たたくさんの事実から、「雪国の人々は雪を生かす工夫をして生活している」という結論を導いたり、「日本では、気候を生かした生活をしている」と他の自然環境で生活する人々にも適応することができているときに、概念的知識が獲得されていると考えました。

まず、単元のねらいを獲得させたい概念的知識に即してとらえ直し、到達点を設定しました。さらに、概念的知識に到達するために、主として2つの学習の流れを考えました。1つは、体

験や資料の活用からいくつかの具体的知識を集め、最終的に一般化・概念化して、概念的知識を獲得していく帰納的な学習活動。もう1つは、学習課題を設定した後に、抽象的・概念的な推論（予想）を立て、それを検証するように具体的な事実を集めていく演繹的な学習活動です。また、単元末には、具体的な知識だけではなく、概念的知識がどの程度獲得されたか評価する問題を作成し、診断することを試みました。

2 単元シラバスの活用

上記のような単元計画をわかりやすく児童に示し、主体的な学習で概念的知識を獲得していくことが望めます。そこで活用したのが、単元シラバスです。シラバスは、学ぶ意義や学ぶ内容、学び方などについて具体的に支援し、「学びの自立」を促す学習の道標となるものです。シラバス作成に当たっては、概念化のために、次の視点を取り入れました。

3 自己評価能力の育成

- ①単元のねらい……どんな概念的知識を身につけるのか
- ②学び方……どんな方法で身につけるのか
- ③達成基準……どの程度まで学習が進んだのか、途中でモニター（自己評価）できる情報
- ④補充・発展学習……自己評価を生かすための情報

課題解決の過程で特に重視したのは、自己評価能力の育成です。児童が自分の学習状況を振り返り、適切な解決方法を見出したり、解決の軌道修正をしたりしながら、自分なりの知識を構築する過程を重視しました。そのため、毎時間シラバスの達成基準を参考にしながら、その時間の学習状況をふり返りました。また、自己評価に4つの段階を設定し、よりの確に学習状況を見つめ、単元のねらいに即した自己評価となるよう支援していきました。より高い段階の自己評価ができる児童は、適切な学び方を身につけ、概念的知識を獲得しているという結果が得られました。

Ⅲ 今年度の取り組み

1 単元シラバスの改善

今年度は、6年生の社会科において、学習の手引きとなるシラバスを、単元でめざす姿(ねらい)、身につけたい力、学習計画、評価の観点などに絞って作成しました。その単元で何を考えなくてはいけないのか、どんな力をつけなければいけないのかを明確にすることは、学習の原動力として非常に重要です。課題解決の途中で、自分が今、何を解決しているのか、解決したことはどこにつながっていくのかを見失わずに学習を進めることができます。単元のねらいや課題から逸れずに適切な資料を選択したり、自分の学習を整理したりできるので、より精選された具体的知識から概念的知識を構築することができました。



【シラバスによる自己評価】

2 自己評価の継続

自己評価は、達成基準による3段階の評価と、記述によるふり返りを1年間継続して取り組みました。前述した自己評価の4つの段階にとらわれずに、課題に即して学習状況をていねいに振り返らせることに重点を置きました。この自己評価の繰り返しによって、単なる感想にとどまっていた学習後の記述も、学習内容に踏み込んだものになったり、自分の概念について確認する記述ができるようになったりと変化してきました。

織田信長の天下統一の仕方はすごいと思う。(中略)武力によってすべてを統一しようとした、というまとめでいいのかよくわからないので、もう少し別の面を調べてみたい。

【日本の歴史「3人の武将と全国統一」】

国民主権という言葉が少しむずかしい。選挙をし、国民の代表を選ばなければならないことはわかったけど、「政治の主人公が国民だ」ということはまだ実感がない。

【わたしたちのくらしと日本国憲法】より】

3 他者との交流から概念的知識を広げる

これまでの課題解決学習では、自分で具体的知識を集め、自分で概念を形成していく学習が中心でした。しかし、課題が異なっても、個人の概念形成のパターンは、同じような過程

をとることが多く、そこから得られる知識も浅薄なものとなりがち

です。そこで、今年度は、学び合いを重視し、課題解決の途中でも、小グループや全体で個人の学びを交流する機会を設



【グループでの学び】

けました。また、解決した結果の交流では、クロスセッションなどを取り入れ、それぞれの概念的知識やそれを裏付ける具体的な知識を聴き合う機会を増やしました。以下に示したのは、友達との交流後の学習のまとめです。

日本の近代化は、2つの戦争に勝って、不平等条約を改正し、外国に認められたからだと考えていました。みんなの話を聞いて、学校制度などが整って国際社会で活躍する人が出たことや、工業が発展したこともあることがわかりました。この明治の近代化が今の日本の基礎となったと思います。

【日本の歴史「世界に歩み出した日本」より】

今の日本の課題は、ごみ問題や石油の問題だと思っていたけど、もっともっとたくさんの国と交流する方が重要だと思いました。(中略) 交流することは、別にその国を変えることじゃなく、足りないものを助け合うことだと思います。日本は戦後助けられた国なので、恩返しをしなければならないのでは…(後略)。

【日本の歴史「新しい日本 平和な日本へ」より】

Ⅳ おわりに

概念的知識を獲得していく社会科をめざすことによって、事実を調べるだけの課題解決学習や、バラバラの知識が残るだけの学習から少しずつ脱却できていると感じています。ただ、高学年になればなるほど、体験の有無や具体的知識の量は、概念的知識の深さや広がり左右します。体験等も含め、社会的事象に十分にふれる時間を確保した単元計画の作成が、今後の課題です。また、単元シラバスを活用しながら自己評価を継続していくことは、自分の学びをより長期的に、広い視野から見つめ直す力(自己評価能力)を高めていくと感じています。自ら学習計画を立案し、課題を解決して概念的知識を獲得していくような姿を期待しつつ、更に実践を積み重ねていきたいと思っています。

豊かな
教育実践



小学校社会科で単元を通して活用できる 「福島県内の地域を扱った教材資料」について

～4学年「わたしたちの県」 及び5学年「国土とくらし」～

南郷村立南郷第一小学校 教諭 **増島 哲也**
(平成16年度長期研究員)

I はじめに

昨年度、教育センター長期研究員として、1年間一つの研究に取り組む機会をいただきました。研究協力校の手助けもあり、成果だけではなく、課題もみつけました。今年度は、昨年度の成果と課題の反省を生かして自校で実践を行いました。

II 16年度研究のあらまし

1 研究主題

小学校社会科指導で活用できる「県内地域」の教材化に関する研究～単元を通して活用できる副読本の作成～

2 主題設定の主たる理由

4学年の県内学習のための手引き書となるものが充実していなかった。冊子が作成されている市町村はあるが、資料集的意味合いが強い。また、5学年の寒冷多雪地域を取り扱う学習では、県内の多雪地域を取り扱っての学習資料作成が可能であると考えた。児童にとっては、発達段階に相応しい内容の資料が身近にあることが一番望ましいと考えた。そこで、「本県地域」を取り扱った単元の開発、資料作成が必要と考え、本研究主題を設定した。

3 作成資料

(1) 第4学年

① 単元計画の作成

単元「わたしたちの県」の「単元構成表」と「小・中単元計画表」を作成した。この単元の中で、海沿いの地域として浪江町、平地の地域として福島盆地、山地の地域として南郷村、伝統産業の地域として会津美里町を取り扱った。全26指導時間分作成。

② 指導用副読本及び教師用解説書の作成

児童が取り扱いやすいように教科書型にした。各全53ページ作成。



解説書には、写真や記述に対する補足説明や付記説明、写真やデータを取り扱った意図、指導上の注意点、関連内容が提示されているWebページ紹介などを記した。

③ 単元ワークテスト及び解答・出題解説シートの作成

学習指導要領で表記されている内容について、「知識・理解」「技能・表現」「思考・判断」の三観点で評価できるようにした。



④ 写真資料の作成

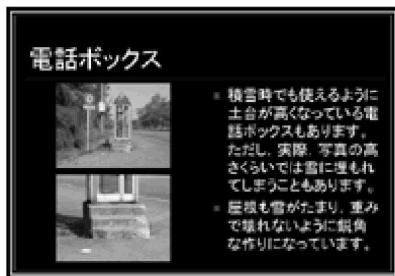
簡単な説明文を添え、教師が事前研究に活用するためだけではなく、指導の中で児童に提示することもできるようにした。

(2) 第5学年

「国土とくらし」の学習内容で取り扱われる寒冷多雪の地域として、南会津西部地域を活用して小単元内容の開発及び資料作成を行った。以下の資料を4学年資料と同様に作成した。

- ① 小単元計画の作成
- ② 指導用副読本及び教師用解説書の作成
- ③ 写真資料の作成

多雪地域ならではの「家屋」「道路」の工夫。学校の様子や児童の生活などの写真を集めた。



4 成果と課題

実際に本資料を活用していただいた学校では有効性が見られたということが大きな成果であった。一方、課題として次のことがあげられた。

- 有効性の一般化についての検証
- 記述内容や数値の迅速な修正及び更新
- 資料や写真一つ一つに対する更に深い分析
- 資料をカラー印刷にするコストと時間

Ⅲ 17年度の実践

(研究の成果・課題をふまえて)

今年度、学校現場勤務に戻り5学年担任となった。研究したことを自分で実践したり、小教研で地域の先生方に広めたりするなど更なる研究を深めることになった。

1 5学年の指導から

児童に質問をした。「雨が多くて暖かいところと言って思い浮かぶ都道府県は？」この回答に「沖縄県」「鹿児島県」の2県が出された。逆に「雪がたくさんふって寒いところ～」という質問の回答は、満場一致で「北海道」であった。誰も自分たちが生活する福島県とは言わなかった。寒冷多雪地域指導の際に、あえて自作の南会津の資料を使わず、教科書通りに北海道十勝

平野を扱った。学習を進める中で、児童の疑問の声が多く聞かれた。

「南郷の方が雪が多いじゃないですか。」
「遊びとかあんまりわたしたちと変わらないじゃないですか。」

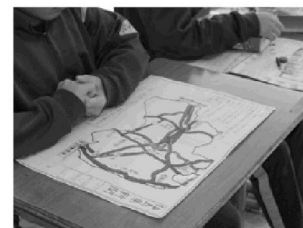
さらに、作成した多雪地域の写真資料を提示すると

「そんなの当たり前じゃないんですか。」
といった反応であった。児童たちには、自分たちが多雪地域に住んでいるという実感が無かったのだ。

そこで、中通りと浜通りから転校してきた児童2名が、前に住んでいた地域とは異なるということを中心に話しながら学習を展開した。

2 4学年の指導から

単元の大導入とまとめの2時間にゲストとして参加した。児童の人数が少ないので、カラー印刷機で人数分副読本資料を印刷した。作成した副読本通り、沖縄県を導入で扱った。「沖縄県の知人教師からの依頼で、福島県のことを児童に教えたいので調べてまとめたものを後日に送ってほしい」という設定にした。調べてまとめる目的がはっきりしている



ので意欲的であった。副読本については、まとめやすかったのであってよかったという意見が聞かれた。

知人は架空人物設定だったので、那覇まで行って児童にお礼の手紙を投函しました。

Ⅳ おわりに

本研究の全ての資料は、カリキュラムセンターに保存されていますのでご利用いただければと思います。また、4学年副読本資料「わたしたちの県(福島県)」については教育センターHP「ふくしま教育情報データベース」に掲載されています。

今後も今以上に、脚を使って価値ある資料を集めていきたいと思っています。

豊かな
教育実践



学習に対して自立し、確かな学力を身に付けた生徒を育てる指導の在り方

～主体的な学びを促す学習活動の工夫～

会津若松市立一箕中学校 教諭 山口 智
(平成16年度長期研究員)

I 平成16年度の研究から

1 研究の趣旨

今日の教育改革の特に重要なポイントである「確かな学力」の向上、「個に応じた指導」の一層の充実を受けて、少人数学習が導入されるようになってきた。しかし、少人数学習、とりわけ習熟度別学習に対しても、様々な不安要素が指摘されている。そこで、生徒、指導教員、保護者の共通理解を深めることによって疑問や不安の解決が図られるよう、情報の発信・受信のあり方について研究するとともに、数学科における少人数学習の効果的な指導法を工夫する必要があると考えた。

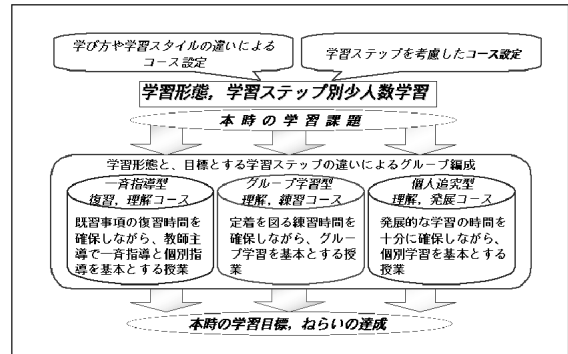
2 研究の内容

(1) 学校評価システムの活用の研究

- ① 学校評価システムについての基礎研究
- ② 数学科における評価システムの構想
- ③ 数学科における評価システムの実践研究
 - 学習の手引きの工夫
 - 数学科通信の工夫
 - アンケート調査の実施

(2) 少人数学習の研究

- ① 少人数学習についての基礎研究
- ② 少人数学習の効果的な活用法の研究
- ③ 少人数学習を取り入れた授業実践研究



3 研究のまとめ（成果と課題）

(1) 学校評価システムの活用の研究について

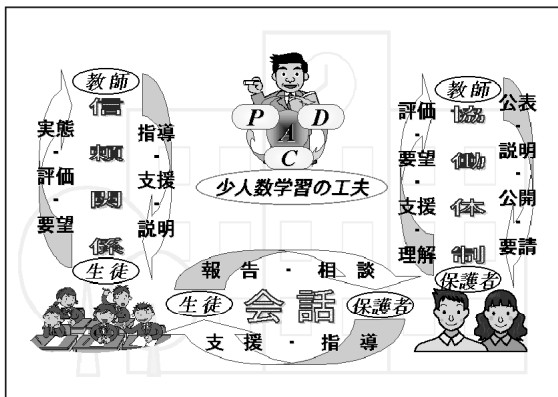
○「学習の手引き」「数学科通信」を発行して教科指導のビジョンを明らかにしながら様々な情報を発信することで、生徒や保護者の教科指導に対する理解が深まった。

○アンケート調査からは、「親子で考えたり話したりする機会ができて良かった」といった声や「アンケートを通して子どもたちのことを知ってほしい」といった要望があった。このほかにも、生徒や保護者の数学科教育に対する意見が多数寄せられ、大変参考になった。しかし、その意見を十分には活用しきれなかったことが反省点であり、情報の受信に対して積極的に取り組み、保護者の目からも明らかな形で指導に生かす改善することができれば、更に理解が得られ協力体制が確立すると考えられる。

(2) 少人数学習の研究について

○「準備する・理解する・練習する・完全にする」の4ステップを基準として生徒にコース選択を行わせることで、授業における目標と家庭学習の課題が明確になり、学習に対する生徒の関心や意欲が増した。

○「学習の手引き」によって、生徒に学習の順序や予定時数などをあらかじめ知らせることが



でき、学習に対する見通しを持たせることができた。しかし、授業や家庭学習での活用を更に進めるためにも、「学習の手引き」を「年間シラバス」や「単元シラバス」に発展させることが必要である。

Ⅱ 平成17年度の取り組み

1 研究仮説

教科指導において、『学習内容理解・活用の4ステップ』を踏まえた『単元シラバス』を活用し学習に対する習慣化を図れば、学習に対して自立した生徒が育成され、確かな学力が身に付くであろう。

2 単元シラバスの作成と活用の工夫

最近、各教科の計画書として『シラバス』作成の動きが広まってきている。また、『シラバス』に関する『作成の手引き』等については、文部科学省や県市町村教育委員会、教育センター等において研究、発表が進められている。しかし、『活用の手引き』に関してはまだまだ不十分であると考えられる。また、実践事例も少ない。そこで、単元シラバスを作成し活用することで、どのような教育的効果があるのか、どのような形式が有効であるのかについて研究していきたいと考えた。

(1) 単元シラバスの発行

生徒の、自学・自習のための学習の手引きとして単元シラバスを作成した。主な内容の1つ目は「主な学習内容」である。生徒に対して、本時の学習への見通しを持たせ、意欲を喚起することができるよう、学習内容や学習活動について記載した。2つ目は「自己評価問題」であり、授業後に学習について振り返り、自らの「学びのサイクル」を意識して学習が進められるよう、達成基準をもとに自己評価問題を記載した。3つ目は「補充と発展」である。生徒の学習進度や習熟度、自己評価の結果に応じて、自ら学習を進めることができるように、発展的、補充的な学習へのアドバイスを記入した。



(2) 成果と課題

「単元シラバス」によって、家庭学習特に復習のために役立ったと感じる生徒が多かったようだ。「単元シラバス」の活用は、生徒の学びを支援する手引き書として効果的な取り組みであったことを、多くの生徒自身が感じた結果であろう。また、「単元シラバス」に期待する意見も多く寄せられ、家庭学習や自主的な学習に対する意欲が増し、「学習に対する自立」が図られてきた成果と言えるのではないと思う。

自己評価を的確に行うためには自己評価問題の工夫が今後の課題である。さらに、補充的・発展的な学習に対応できる問題集を作成、活用することで、学習に対する自立と確かな学力の向上がさらに図られると考える。

Ⅲ おわりに

学校を離れ、教育センターへ勤務し研究に打ち込んだ1年間は貴重な時間でした。多くの先生方との出会い、助言をいただきながら取り組んだ研究、信頼できる仲間との討論など様々な体験は私の財産です。私にとって、1年間で得た財産を生かし、さらに精進しながら現在の職務に全力で取り組んでいくことが使命であると考えています。

実践に役立つ教育資料

—最近の研究紀要・資料から—

センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

学校組織マネジメント研修～すべての事務職員のために～（モデル・カリキュラム）

文部科学省 マネジメント研修カリキュラム等開発会議（2005年2月）

組織マネジメントのエッセンスの提供と新しい学校づくりのための職能開発をねらいとしています。また、学校経営への協働参画の重要性の理解と自律的な職能開発の手法の習得を目的として、事務職員版モデル・カリキュラムが提示されています。

自閉症教育実践ケースブック より確かな指導の追究

国立特殊教育総合研究所（2005年10月）

知的障害養護学校における指導事例を中心に構成されていますが、指導内容や指導方法、自閉症の特性を考慮した支援は、小・中学校等においても応用できるものとなっています。

ポートフォリオ評価を活用した指導の改善、自己学習力の向上及び外部への説明責任に向けた評価の工夫—生活、国語、社会、理科、音楽、図画工作・美術、家庭、保健体育、英語、道徳、特別活動を事例にして（第三次・最終報告書）—

国立教育政策研究所初等中等教育研究部（2005年3月）

単元レベルでの学習効果の判定と評価規準の運用及び指導要録とのつながり、指導と評価の一体化及び児童生徒の自己学習の促進に資する評価の在り方に関する研究を行い、基本モデルが提示されています。

総合的な学習における学習者の認識の深まりを促す教育内容・方法の開発研究—学習者の内発的必然性の喚起と振り返り活動をてがかりとして—

国立教育政策研究所（2004年3月）

児童生徒の学習意欲を高める教材開発の方法と教師が自らの授業を振り返る授業研究の方法（授業リフレクション）を開発し、学校現場で実際に検証してあります。

※ 教育資料については、カリキュラムセンター（内線33番）までお願いします。また、福島県教育センター Web の検索システムを活用し、必要な図書・文献・研究資料の検索番号やキーワードをご連絡いただければ、こちらで準備し発送します。なお、必要な箇所をコピーで送付することも可能です。



平成18年度研修講座案内

専門研修

79講座を開講します。1日講座を増やしたり、教育センター以外の場所での開催を増やしたり、先生方がより参加しやすくなるよう工夫を加えました。

教科教育系講座

17年度まで推薦だった「**小学校英語指導者講座**」が、希望制になりました。18年度は、県北、県中、県南の3地区で開催します。

保健体育では、保健講座に加え、「**小・中・高等学校体育講座**」を新設し、「**戦術学習を重視した球技指導**」を取り上げます。

教育相談系講座

17年度も好評だった「**今日的諸問題の理解と対応講座**」。不登校、AD/HDに加え、「**感情のコントロールが苦手な児童生徒の理解と対応講座**」を新設します。児童生徒の衝動的な問題行動の予防に焦点を当てながら、具体的な指導援助の方法について学びます。

教科外教育系講座

「**学校評価研修会**」に、小・中学校向けの講座を新設します。「**組織活性化のための学校評価実践講座**」では、小・中学校の教頭を対象に、評価の理論及び実務について研修を行います。《推薦》

情報教育系講座

17年度現地開催で好評だった「**Excel 入門**」「**PowerPoint 入門**」講座を、18年度も4地区で開催します。また、「**情報モラルの理解と指導講座**」も、引き続き7地区で開催します。

基本研修

基本研修は、「**福島県教職員現職計画**」に基づき体系的に実施されています。ライフステージに応じた研修の充実を図るため、次のような改善を行います。

初任者研修

- 研修内容の充実を図るために、「**学校評価**」「**総合的な学習の時間**」「**キャリア教育**」を必須項目に位置付けます。
- 連絡協議会**の機能を生かし、指導の充実を図ります。

経験者研修Ⅰ

- 研修の成果や課題をとらえやすくするために、「**評価表**」を導入します。評価項目は、**経験者研修Ⅱ**につながる内容です。
- 活用しやすい手引きを作成しました。

経験者研修Ⅱ

- 評価に基づいた適切な研修計画が立案できるよう、**評価表**を新しくしました。
- 計画の立案から実施までスムーズに行えるよう、手引きと実施上の留意点をわかりやすくまとめました。